

## Ⅱ－３ 高等部の実践

テーマ：自己実現につながる学習内容のあり方

## Ⅱ－３ 高等部の実践

テーマ：自己実現につながる学習内容のあり方

1. はじめに	85
(1) 本校高等部の教育課程・時間割	
(2) 昨年度の研究	
(3) 今年度の研究	
2. 大目標・小目標の設定	91
3. 実践	95
(1) 本校高等部の作業学習の概要	
(2) 実践Ⅰ プラタナス委員会	
(3) 実践Ⅱ 作業学習での実践	
(4) 実践Ⅲ 学習発表会（ステージ発表）	
(5) 事例Ⅰ 生徒同士の相互評価をもとに、自己認識や自己評価を 高めることを目指した事例	
(6) 事例Ⅱ 生徒が現在「できる活動」「している活動」をもとに、 生徒の思いを満たすことを目指した事例	
4. まとめ	117
(1) 今年度の研究のまとめ	
(2) 2年間の研究のまとめ	
(3) おわりに	
参考文献	

## Ⅱ－３ 高等部の実践

### １. はじめに

高等部では、昨年度より「自己実現につながる学習内容のあり方」というテーマで、研究に取り組んでいる。この研究は、平成 20～22 年度に「生徒の『なりたい自分』を支援する取り組み」というテーマで取り組んできた高等部の研究をもとにしたものである。

今回の「自己実現につながる学習内容のあり方」についての研究では、学校生活の中で、高等部の生徒全員に対して、生徒一人一人の「したい」「なりたい」という思いを大切にしたり、自己実現につながるようにしたりするためには、個に応じた学習活動を設定するだけでなく、日々の学習活動について見つめ直すことが不可欠であると考え、授業研究に取り組むこととした。２年間の研究のうち、一年次は主に教科学習に焦点を当てて、二年次は作業学習に焦点を当てて取り組むこととした。

#### (１) 本校高等部の教育課程・時間割

本校高等部では、表Ⅱ－３－１のように、「学ぶ」「働く」「暮らす」「遊ぶ（余暇）」の４つのカテゴリーで学習活動を構成している。

表Ⅱ－３－１ 本校高等部の学習活動の構成

カテゴリー	各カテゴリーでの活動	関係する教科等
学ぶ	・自分の課題となる事柄に取り組む活動 ・身の回りの事柄について、教師や他の生徒とともに知ったり調べたりする活動	・各教科の学習 ・「課題学習」
働く	・自分の役割を果たすことによって、他者から認められたり、喜ばれたりする活動 ・自分に合った役割や職業について考える活動	・作業学習 ・産業現場等における実習 ・職業科 ・職場見学 等
暮らす	・自分の身の回りを整える活動 ・衣食住に関する知識や技術、態度を身につけるための活動	・日常生活の指導 ・家庭科 ・保健体育科 ・掃除 等
遊ぶ (余暇)	・自分の好きなこと、楽しいこと、面白さを追求する活動	・「趣味学習」 ・「ほんもの学習」 等

このうち、「趣味学習」「ほんもの学習」は、本校独自の取り組みである。  
なお、本校の高等部の教育課程は表Ⅱ－３－２、時間割は表Ⅱ－３－３のとおりである。

表Ⅱ－３－２ 本校高等部の教育課程

指導の形態	領域・教科を合わせた指導							教科別の指導							学校設定教科		領域別の指導			学習の総合的な時間※6	総授業時数
	日常生活の指導	生活単元学習	作業学習	課題学習※1	からだづくり	全校集会	学部集会	国語	数学	音楽	保健体育	職業	家庭	情報	芸術※2	趣味学習※3	道徳	特別活動	自立活動		
1年Ⅰ	114	70	330	—	87	15	20	57	57	35	35	35	35	35	70	35	※4	35	※5	20	1085
1年Ⅱ	158	70	330	175	87	15	20	—	—	35	35	—	—	—	70	35		35		20	1085
2年Ⅰ	114	70	330	—	87	15	20	57	57	35	35	35	35	35	70	35		35		20	1085
2年Ⅱ	158	70	330	175	87	15	20	—	—	35	35	—	—	—	70	35		35		20	1085
3年Ⅰ	114	70	330	—	87	15	20	57	57	35	35	35	35	35	70	35		35		20	1085
3年Ⅱ	158	70	330	175	87	15	20	—	—	35	35	—	—	—	70	35		35		20	1085

〔備考〕

※「指導の形態」のⅠ、Ⅱは、Ⅰ類型、Ⅱ類型を表す

Ⅰ類型は教科別の指導に重点を置く、Ⅱ類型は領域・教科を合わせた指導に重点を置く

※1 「課題学習」は、Ⅱ類型の生徒を対象に、国語的・数学的・作業的な課題の中から、生徒の実態に合わせて、個別または集団で取り組む

※2 「芸術」は、音楽(1年)、美術(2年)、書道(3年)を行う

※3 「趣味学習」は、カラオケ、エクササイズ、ビーズ、マンガ・イラストのうちのいずれかひとつを選択して行う

※4 道徳は、学校の教育活動全体を通じて指導する

※5 自立活動は、学校の教育活動全体を通して指導する 必要とする生徒は、抽出して指導する

※6 高等部の総合的な学習の時間として、「ほんもの学習」を行う

年間2回行う体験的な校外学習で、事前・事後指導を含め計 20 時間を設定する

表Ⅱ－３－３ 本校高等部の時間割

	月	火	水	木	金
1	国語・数学・自立活動/日常生活の指導				
	朝の会				
	からだづくり				
2	全校集会/部集会	作業学習	保健体育	作業学習	特別活動
3	数学 /課題学習		家庭 /課題学習		生活単元学習
4	国語 /課題学習		職業 /課題学習		
5	芸術		趣味学習		音楽 情報/課題学習
6			終わりの会		
		課外活動 (スマイルクラブ)			
	終わりの会			終わりの会	

## (2) 昨年度の研究

昨年度は、「自己実現につながる学習内容のあり方」のテーマで研究を進めるにあたって、次のことを高等部の教師間で話し合い、確認した。

- ・研究テーマに取り上げた「自己実現」という表現について、本校の研究での定義（8ページ参照）に、キャリア教育の視点を加えて、高等部独自の定義を設ける。

### 【本校高等部での「自己実現」の定義】

- ・自分の「したい」「なりたい」ことに向かって挑戦すること
- ・自分の得意なことを生かして、集団や社会の中で役割を果たし、他者から認められること

- ・生徒、保護者、教師の三者の思いをもとに、学級担任が大目標、小目標（9ページ参照）を立案する。それをもとに、懇談を行い、大目標・小目標を決定する。（懇談は、保護者との懇談の場合もあれば、生徒も含めた三者懇談の場合もある。）
- ・各教科等の目標は、授業担当者が設定する。
- ・学習活動の設定にあたっては、生徒一人一人の大目標・小目標が決まってから学習活動を決めるのではなく、各教科等で、生徒の実態をふまえた内容や生活に結びついた内容を取り入れることを考慮しながら、年間指導計画を作成する。
- ・その際には、コア・カリキュラム（89ページ、注1参照）の考え方をもとに、余暇活動の充実をねらいとした校外学習（「ほんもの学習」）と学習発表会を核にして、各教科等の学習活動を関連させて取り組むこととする。それによって、大目標・小目標に関連した学習活動が展開できるのではないかと考えた。

それを受けて、一年次である昨年度は主に教科学習に焦点を当てて、授業研究に取り組んできた。その結果、次のような成果と課題が得られた。

### 【成果】

- ・高等部の生徒全員（25名）に対して、生徒、保護者、教師の三者の思いをもとにした目標（大目標、小目標）を立てることができた。
- ・コア・カリキュラムの考え方をもとに、核になる学習活動（校外学習・学習発表会）と各教科の学習活動とを関連して進めていくことができた（90ページ、表Ⅱ-3-6参照）。それによって、生徒一人一人の大目標・小目標と各教科等の学習活動との間に関連があった。
- ・核となる学習活動が終わった時点で、ワークシートを用いて、生徒と一緒に振り返りをして、次の活動につなげるようになった。また、生徒の実態や活動内容に応じたワークシートを用いるようになった。
- ・「自分を見つめ、表現する」という視点での学習活動を、高等部の生徒全員を対象に取り組むことができた。

### 【課題】

- ・生徒が自分自身の目標について、可能な限り自らの言葉で表現できるように、教師がその機会を設けたり、必要な指導や支援をしたりすること
- ・学習活動が一通り終わった時点で、生徒自身が、自分の立てた目標との関係で学習活動を振り返り、それをふまえて、目標を立て直したり、新たな目標を立てたりできるように、教師がその機会を設けたり、必要な指導や支援をしたりすること

### (3) 今年度の研究

二年次である今年度は、作業学習に焦点を当てて研究に取り組むこととした。作業学習は、本校でも教育課程の中核に位置づけられ、多くの授業時数が配当されており、産業現場等における実習や教科「職業」とともに、「働くこと」について生徒が具体的に学ぶことを意図して設定されている。そのため、「自己実現につながる学習内容のあり方」という研究テーマにせまるためには、作業学習に焦点を当てた実践研究も必要であると考えた。

また、昨年度の研究を通して、「生徒が自分自身の目標について、自らの言葉で表現し、その目標との関係において活動後に振り返る」ことが課題として挙げられた。そこで、今年度の研究においては、「目標設定と評価」のあり方について、さらに意識的に取り組むこととした。昨年度は、大目標・小目標（半年間の目標）の設定と評価に重きを置いていたが、今年度は、毎時間の授業での目標設定と評価について、重点的に取り組むこととした。なお、評価については、図Ⅱ－３－４に挙げた３つの評価の中から、いくつかを重ねて行っていくこととした。

- |  |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"><li>① 他者が行う「他者評価」</li><li>② 結果の確認や評価を自分自身が行う「自己評価」</li><li>③ 子ども同士が互いに確認や評価を行う「相互評価」</li></ul> |
|--|

図Ⅱ－３－４ 多様な評価（藤原，2012）

さらに、平成20年度からの本校での研究をふまえて、高等部ではICF（国際生活機能分類）の考え方を参考にしながら、次のような観点で授業を見つめ直すこととした。

- |   |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"><li>・ 本人の強みが活かされているか</li><li>・ 本人との話し合いを十分に持っているか</li><li>・ 選択して決める場面があるか</li></ul> |
|---|

具体的には、以下のように研究を進めていくこととした。

#### ①研究目的

- ・ ICF（国際生活機能分類）の考え方に学びながら、生徒の自己実現につながるような作業学習での学習内容のあり方について検討する。
- ・ その中で、生徒が自分自身の目標について表現し、活動後に振り返るようになるための指導・支援のあり方についても検討する。

#### ②研究方法

以下のような流れで授業研究を行う。

- ・ 各工房・グループの担当者は、生徒の自己実現につなげるための授業改善のポイントを決めて、実践する。
- ・ 実践においては、特定の生徒（1～2名）に焦点を当てて、教師の取り組みと生徒の言動や様子の変化について捉える。
- ・ 高等部研究会（週1回定例）では、各工房・グループの担当者が実践の方向性・内容と、生徒の言動や様子について報告し、それをもとに、研究テーマや研究目的に沿って協議をする。

③研究計画

表Ⅱ－３－５のような計画で研究を進めていく。

表Ⅱ－３－５ 今年度の研究計画

4月	・全体研究会 ・昨年度の成果と課題について(確認)
5月	・今年度の研究について
6月	・各工房の実践をもとに協議①
7月	・研究授業(チャレンジ工房)
8月	・研究中間報告会 ・今後の研究について
9月	・各工房の実践をもとに協議②
10月	
11月	・研究紀要について
12月	
1月	・教育研究会に向けて
2月	・教育研究会 ・今年度の振り返りと来年度の研究に向けて
3月	・全体研究会

注1：コア・カリキュラム (core curriculum) とは、総合学習の課程を中核 (コア) として、教科の統合を志向するカリキュラムである。(佐藤, 1996)

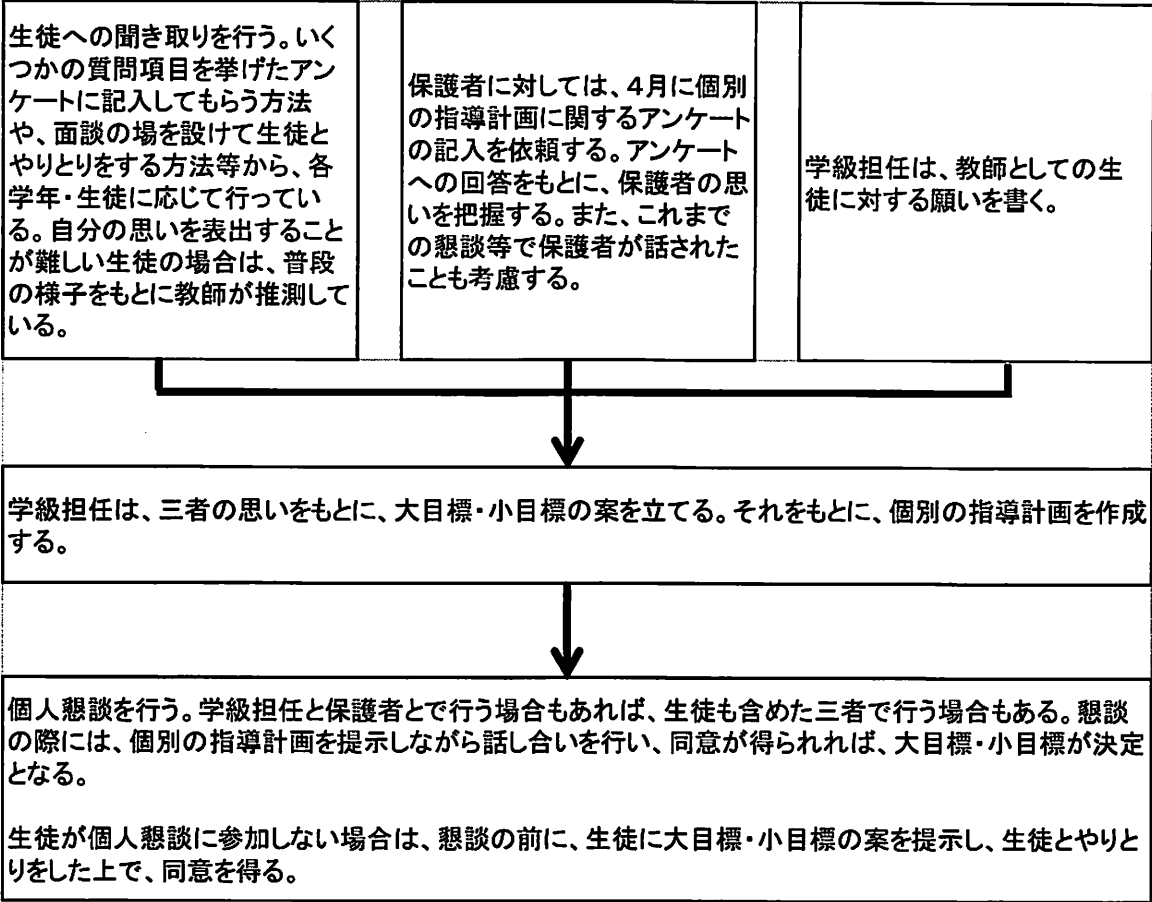
表Ⅱ－３－６ 平成 23 年度の研究(一年次)での実践(コア・カリキュラムの考え方を取り入れた各教科等の学習内容)

領域・教科等の名称 / 月		1学期				2学期				3学期		
		4	5	6	7	9	10	11	12	1	2	3
核となる活動				ほんもの学習(校外学習)		学習発表会				ほんもの学習(校外学習)		
合 領 域 ・ 教 科 指 導 を	日常生活の指導											
	生活単元学習			(3年)・介護等体験の学生へのプレゼンテーション		・ステージ練習						
	作業学習					・製品の製造、準備、包装等 ・販売 ・売上金の確認						
	課題学習(Ⅱ類型)					(国語)「わたし、今」 ・絵本『わたし』 ・自分の顔を見て描く ・自分の好きなことを発表する				(生活くらし) ・スूप作り ・ホットプレートを用いた簡単な調理		
	からだづくり											
教 科 別 の 指 導	国語(Ⅰ類型)			・電話のかけ方(予約の仕方)		「わたし、今」 ・絵本『わたし』 ・自分の顔を見て描く ・自分の思いを書く、発表する ・事後の振り返り				・自宅住所、電話番号、学校名、生年月日を書く ・団体用メンバー表(ボウリング)を書く		
	数学(Ⅰ類型)			・バス時刻表の見方 ・施設やお店の料金・開館時間等の調べ方、表へのまとめ方								
	音楽					・歌唱 「手紙～拝啓十五の君へ～」						
	保健体育											
	職業(Ⅰ類型)			・施設やお店で働く人々						・療育手帳について (意義・用途等)		
	家庭(Ⅰ類型)			・ほんもの学習で着る服		・私の好きな服、見せたい服				・ほんもの学習で着る服		
	情報(Ⅰ類型)			・インターネットでの検索						・調べ学習 ・バスくーる		
	芸術					(音楽)歌唱 「手紙～拝啓十五の君へ～」 (美術)わたしの草を見て描く (書道)季節の言葉						
領 域 別 の 指 導	趣味学習					(マンガ・イラスト) 作品展示に向けて						
	道徳											
	特別活動											
	自立活動											
行 事	総合的な学習の時間			ほんもの学習 ・選択・計画・校外学習 ・まとめ・報告						ほんもの学習 ・選択・計画・校外学習 ・まとめ・報告		
		入学式	運動会 体育交歓会	修学旅行 現場実習 (2・3年) 職場見学(1年)	ほんもの学習	教育実習 養護実習 秋の遠足	現場実習 (全学年)	学習発表会			ほんもの学習	卒業式



2. 大目標・小目標の設定

高等部では、図Ⅱ－３－７のような流れで大目標・小目標を設定している。大目標・小目標は、個別の指導計画での目標になっている。



図Ⅱ－３－７ 大目標・小目標設定までの流れ

大目標は、半期毎に目標設定・評価をしているが、高等部では、今年度、1年間同じ目標で取り組むことを試行した（必要があれば、目標を更新する）。小目標は、前期・後期でそれぞれ目標を設定し評価することとした。

なお、各生徒の目標一覧は、92～94 ページに記載されている。

資料3-1 高等部1年 生徒・保護者・教師の思い、および大目標・小目標一覧表（平成24年度前期）

	氏名	生徒の思い	保護者の思い	教師の思い	大目標	小目標
1	A男	・高等部で「お仕事をがんばりたい」 「スーパーのレジをやってみたい」 ・20歳になったら「レジの仕事」、「休日映画」	・本人の特性にあった環境で、できれば得意とする作業に取り組み、生活リズムを保てるとよい。 ・働き、少額でもお金をもらえる実感、喜びを感じ、自己肯定感が持てる社会人になって欲しい。 ・将来、一人で楽しめる余暇活動。	・無理なく学校生活を送って欲しい。	活動への参加の仕方を自分で選択しながら、無理なく学校生活を過ごす	①年度初めに、各教科の学習グループを選択する ②その日の作業学習で取り組む内容や量を教師に伝える
2	B男	・「ヘリクラブをがんばる」 ・20歳になったら「ルパンになりたい」 ＝コスプレをして、街を歩きたい、パーティをしたい ・現場実習「お風呂が好きなので、お風呂掃除をしたい」	・状況説明ができるようになってほしい。 ・場に応じた話ができるようになってほしい。 ・友だちとの付き合いができるようになってほしい。 ・自転車等を使い行動範囲をひろげてほしい。 ・友人と出かけられるようになってほしい。	・高等部入学当初から、張り切って取り組むことが多いので、無理しすぎないで欲しい。 ・一定のペースで活動に取り組むようになるとよい。	ペース配分に気をつけながら、高等部の生活を過ごす	①作業学習で、ペース配分に気をつけながら取り組む ②モヤモヤした思いや、体の不調等を教師に言葉で伝える
3	C子	・どんな仕事があるのかわからない、知りたい ・高等部では勉強を頑張りたいが、どんな勉強をすればいいのかわからない、知りたい	・漢字や計算の力をつけさせたい。お金（おつり）の計算の理解 ・一人で店に入り、買い物ができるようになって欲しい。	・どんな仕事があるのか選択肢を増やして欲しい。 ・自分の得意なこと、苦手なことに目を向け、今の生活や職業選択に生かせるようになって欲しい。	してみたい仕事を大人と一緒に探す	①自分の得意なところ、不得意なところを知る ②決まった金額の中で買い物する計画を立てたり、実際に買い物する
4	D男	・高等部で「運動会をがんばります」。「B男と遊ぶ。」 ・20歳になったら「コナン(女をまもる)」＝「映画を見たから」「ベルトからサッカーボールが出てくる」	・良く気が付くので、それを言葉で表現できるように頑張っています。 ・一方的に指示されると、情緒不安定になります。顔の表情を気にして下さい。きっと本当に伝えたいことがあるはず。 ・続けられる仕事に就いて欲しい。 ・自立して欲しい。 ・言いたいことは相手に伝えて欲しい。 ・自分の足で好きな場所に行きたくて欲しい。	・登校後に教師に話しかけてくるので、そのような場面や相手が広がるとういのではない。 ・高等部の生活に慣れ、働くことにも徐々に目を向けて欲しい。	自分の伝えたいことを、身近な大人に言葉で伝えようとする	①登校後や休み時間に、自分の感じたことを教師に伝える ②生活単元学習でのアンケートに答える ③作業学習等で、「できました」「手伝ってください」等を言う
5	E男		・卒業後を見据えて、計画的、段階的にステップアップしてもらいたいので、家庭での過ごし方、社会とのつながり方など、具体的なアドバイスが欲しい。 ・決まったところには、自分で歩いたり、公共交通機関を使ったりして、意思を持ち移動してもらいたい。 ・嫌とか良いとか、気持ちを表現できるようになって欲しい。	・本人に合った作業と一緒に見つけていきたい。	自分の得意なことを生かして、様々な作業や活動に取り組む	①作業学習等を中心に、様々な活動に取り組む ②作業学習等で、「できました」「手伝ってください」等を言う
6	F子	・人の役に立つことができると嬉しい。 ・特別な仕事や役割があると嬉しい。 ・頑張っていることを好きな先生に伝えたり、認めてもらったりしたい。	・まわりの方とトラブルなく過ごして欲しい。 ・言葉づかいに気を付けて欲しい。 ・自分の気持ちを素直に表せるようになって欲しい。 ・場に応じた行動、話ができるようになって欲しい。	・相手に受け入れられる話し方をするようにして欲しい。 ・自分も周りの人や物も傷つかないような関わり方をするようにして欲しい。 ・自信を持ってこなせる役割をもって、周りの人に認められるようになって欲しい。	自分に合った役割を見つけ、取り組みたい	①相手の応答に応じて、言い方や関わり方を工夫する ②様々な作業を経験する中で、周りの人に認められる経験を重ねる
7	G男		・身だしなみを整えられるようになって欲しい。 ・金銭管理ができるようになって欲しい。 ・楽しめること、興味を持てることを見つけて欲しい。 ・一人で公共の乗り物に乗れるようになって欲しい。 ・社会のルール、マナーを身に着けたい。	・適切な方法で、教師に注意喚起ができるとよい。 ・本人と教師とで、共通の話題等を持てるとよい。	落ち着いた取り組み活動や楽しめる活動を、教師と一緒に見つける	①課題学習や作業学習等を中心に、様々な活動に取り組む ②休み時間に、自転車等の遊びをする
8	H子	・高等部で「漫画を描きたい」 ・20歳になったら「一人で出かけたい(電車やバスで繁華街へ)」 ・今欲しいこと「小学部で後輩と遊ぶ」、「四葉探偵」	・整理整頓して欲しい。 ・抜毛が気になる。 ・得意な分野を伸ばしてあげたい。 ・体を動かすことを楽しめるように。 ・職業の選択肢を増やす。得意分野を生かした仕事に就きたい。 ・外出の誘いに応じて欲しい。	・おうちの人や周りの人に心配をかけないで、出かけられるようになって欲しい。 ・自分の心身の状態や気持ちの変化に目を向け、伝えられるようになって欲しい。	してみたい仕事を大人と一緒に探す	①自分の得意なところ、不得意なところへ気づき、伝える ②活動への参加の仕方について、自分で目標を立てて取り組む

資料3-2 高等部2年 生徒・保護者・教師の思い、および大目標・小目標一覧表（平成24年度前期）

	氏名	生徒の思い	保護者の思い	教師の思い	大目標	小目標
1	I男	ローマ字入力ができるようになりたい。	学習に力をいれて欲しい。 苦手なことを減らして欲しい。	苦手なことを避けずに、活動に取り組んで欲しい。	卒業後の生活に向けて、力をつける。	①ひらがなの読み書きができる。 ②キーボードを使って文字入力(ローマ字)ができる。 ③就労に必要とされる程度の挨拶・返事・報告等ができる。 ④体力の向上を図る。
2	J男	将来的に一人暮らしをしたい。	障害に対し、理解のある進路に進んで欲しい。	他の生徒に手や口を出さずに、教師に相談して欲しい。	授業への参加の質を上げて、スキルアップを図る。	①全ての授業に参加する。 ②学習規律を守る。 ③未経験などで不安のある活動にも取り組んでみる。
3	K男	〇〇作業所で働きたい。	一人のできることを増やして欲しい。 自分から行動して欲しい。	常同行動などではなく、意識的な行動をして欲しい。	日常的な活動を自主的に行う。	①登校してからの一連の課題を自主的にこなす。 ②下校時の準備を自主的に行なう。 ③集中して課題に取り組む。 ④家庭で宿題を自発的にする。
4	L子		体重の増加を止めたい。 進路を意識した指導をして欲しい。 できることを増やして欲しい。	主体的に行動できることを増やしたい。	一人で活動できる時間を延ばす。	①ゆっくり食べる ②身体を動かす機会を増やす ③好きなこと、集中できることを見つける ④ひとりで過ごすことができるようになる
5	M男	いろいろなことができるようになりたい。	生活経験や一般常識を身につけて欲しい。	知識や経験を増やして、モチベーションを上げて欲しい。	生活経験や知識を増やす。	①買い物に必要な知識を学ぶ ②買い物の経験をする ③お金の価値について学ぶ ④お小遣いをもらい使う体験をする
6	N子	自分ペースで、できることに取り組んでいきたい。	進んで活動して欲しい。 一般就労して欲しい。 たくさんの人と接して欲しい。	自分の思いを伝えて欲しい。 学校で意欲的になれることを見つけて欲しい。	週に4日は登校する。	①菓子工場の作業で、達成感を得る ②学校で他生徒と関わる活動の機会をつくる(ほんもの学習、生活など) ③1日の始めからでなくても登校してよいので登校することを重視する
7	O子		労働の対価について理解して欲しい。 社会のルールを身につけて欲しい。	精神的に安定して学校生活を送って欲しい。	さまざまな活動で達成感を味わう。	①手先の器用さを生かし作業学習や趣味学習に取り組む ②いろいろな活動に挑戦してできることを増やす
8	P男		知的好奇心を満足させて、情緒安定につなげたい。 見通しを持って情緒の安定した生活を送って欲しい。	活動に対する見通しを持って、情緒の安定した生活を送って欲しい。	活動に十分取り組むことを通して、学校生活を落ち着いて過ごす。	①課題に取り組む時間を増やし、休憩を計画的にとるようにする。 ②休憩時間の過ごし方を改善する。

資料3-3 高等部3年 生徒・保護者・教師の思い、および大目標・小目標一覧表（平成24年度前期）

	氏名	生徒の思い	保護者の思い	教師の思い	大目標	小目標
1	G男	・ノートに日課を書いてもらうのが好きで、見通しももてる。 ・身のまわりのことや予定を確認すると、落ち着く。 ・行事予定や給食の献立を確認して、教師に同意を求めるのが好きである。	・叩いたり蹴ったりすることがなくなってほしい。 ・身だしなみを整える時におとなしくしてほしい。 ・家で何か楽しめることを見つけてほしい。	・活動の見通しをもつことで、穏やかに過ごし、充実した学校生活を送って欲しい。	見通しをもって毎日の生活に取り組む	①自分で日課を確認して、ノートに書く ②活動を選択する
2	R男	・「漫画を描きたい」	・精神的に安定して生活して欲しい。 ・卒業して働くことを理解して欲しい。 ・身だしなみについて注意して欲しい。	・書いてあることを理解し、行動して欲しい。	働くための勉強をする	①心理的な安定をはかる ②集団参加ができる、社会のルールを守る ③働くことの意味を理解する ④身だしなみをきちんとする
3	S子	・「ベースを弾いてみたい」 ・「体力をつけたい」 ・「言葉遣いに気をつけたい」	・適性がある仕事を学校から助言して欲しい。 ・友達同士で遊びに行けるようになって欲しい。	・生活や社会経験を増やしていきたい。 ・体力をつけて欲しい。	体力をつけステキな人になりたい	①体力をつける ②発音を意識し話す ③話を書き留める
4	T男	・「仕事をしたい」 ・「カラオケで歌いたい」 ・「おかずを作ってみたい」(キャベツの千切り、刺身)	・本人に合う道路を見つけてほしい。 ・自分から話をできるようにして欲しい。	・ゆっくり話そうにして欲しい。 ・落ち着いて行動して欲しい。	働く力を身につける	①1日の予定を書き行動する ②自信を持って話す ③落ち着いて話す
5	U子	・「ボウリングがしたい」 ・「カラオケがしたい」 ・「ドッチボールがしたい」 ・「計算できるようになりたい」 ・「しりとりがしたい」	・楽しんで働けると良い。 ・一般就労して欲しい。	・落ち着いて行動して欲しい。 ・話を聞く態度を育てたい。	基本的な生活習慣を身につける	①働くことを学ぶ ②一日の流れを理解し行動する ③話の内容をメモする
6	V男	・「来年4月には、趣味のために働く」 ・「一般就労希望」 ・「アイドルやバンドの歌手になりたい」 ・「希望する企業への就職がだめだったら、家から近くてスーパーや書店など、どこでもいいから就職する」	・一般就労をさせたい。 ・言葉遣いに気をつけてほしい。 ・素直で真面目なところを伸ばしてほしい。	・卒業後の充実した生活に向けて、必要な知識等を可能な限り身につけて欲しい。	有意義に趣味を楽しんで就職のための勉強を頑張る	①趣味の幅を広げる ②仕事に必要な知識を身につける ③友だちと遊びに行く方法を学ぶ
7	W男	・「マンガ家になりたい」 ・「来年の4月には、なるべく賃金が高い所で働きたい」 ・「そのために作業を頑張る」 ・「マンガ家になるための画力の向上、Gペンを使いこなす」	・危険を認識して、安全に過ごして欲しい。 ・目上の人に対して、ハキハキと挨拶できる。 ・もつと身だしなみを意識して欲しい。 ・本人がいきいきと働ける場に進んで欲しい。 ・得意分野をのびのびと伸ばして欲しい。 ・公共交通機関を利用して行動範囲を広げて欲しい。 ・思い切り伸び伸びと遊んで、感性を磨いて欲しい。	・卒業後の生活に必要なことを学び、働くことへの意識を高めて欲しい。	このあとの人生のために「生きていく力」をつける	①気になる職業について調べる ②自分の適性を知る ③将来の生活スタイルについて考える ④マンガ家をめざすために画力を上げたり、道具をつかひこなすのをがんばりたい
8	X男	・予定を知りたい。 ・自分で考えた予定を伝えて願いを叶えたい。 ・予定や気に入った文字等を自分で書いたり、周りの大人に書いてもらったりすることが好き。	・自分の思いを伝える事(無理やりでなく)ができ、相手の事もわかれば…。 ・一般的に使う漢字が書けて言える。数がわかる。 ・無理のない仕事。自分に合った作業所で末永く働いて、いずれはケアホーム(グループホーム)に…。	・活動の見通しをもつことで、穏やかに過ごし、充実した学校生活を送って欲しい。	活動や予定を交渉したり選択したりして、見通しを持つ。	①自分の思いを教師に伝える ②自分のしたい活動を教師と交渉しながら選択する ③自分で日課を確認して、ノートに書く
9	Y男	・「『お願いします』と言えるように頑張りたい」 ・「仕事をがんばってやりたい」 ・「しっかり挨拶したい」 ・「仕事を自分で決めたい」 ・「友だちとボウリングに行きたい」 ・「パソコンをもっと早く打てるようになりたい」	・一人でできることをもっと増やしたい(調理、掃除、洗濯、困ったときは人に頼る、自分で行動できる。目上の人に対する言葉遣いなど)。 ・無理なく、でも本人にとってやりがいのある仕事を見つけて、しっかりした生活リズムの中で過ごしてほしい。	・卒業後の生活をより良く過ごすために、必要な知識や困ったときに助けを求める手段を身につけて欲しい。 ・一人でできることを増やして欲しい。	卒業後の生活に向けて、自分でできることを増やす	①自分でできることを増やす ②困った時に、助けを求めたり、自分のしたいことを伝える ③社会人に必要な知識を身につける

### 3. 実践

今年度は、作業学習の各工房での実践に加えて、各工房から選出した代表の生徒による「プラタナス委員会」の活動と、毎年11月に行っている「学習発表会ステージ発表での作業学習の発表」の2つも行った。

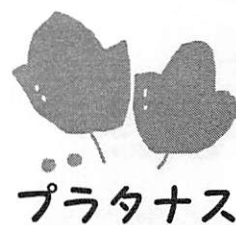
ここでは、本校高等部の作業学習の概要についてまず述べた後、プラタナス委員会、各工房、学習発表会（ステージ発表）の順で実践を述べていく。そして、特定の生徒に焦点を当てた事例を2つ紹介する。

#### （1）本校高等部の作業学習の概要

本校高等部では、火曜日と木曜日の各5単位時間・計週10単位時間、作業学習を行っている（86ページ、表Ⅱ－3－3参照）。今年度は、菓子工房・陶工房・菜園工房・チャレンジ工房の4つの工房に分かれて取り組んでいる（96ページ、図Ⅱ－3－8参照）。作業活動での課題や生徒間の相性等を考慮し、生徒が高等部の3年間で2つ以上の工房を経験できるように、教師が集団編制をしている。

また、平成19年度から「プラタナス・プロジェクト」を立ち上げ、新しい作業学習を目指す一連の活動に取り組んだ。プロジェクト開始当初のコンセプトは、次の4つである。

- ・「プラタナス・ブランド」としての展開
  - 「〇〇班」から「〇〇工房」へ
  - ロゴマーク、ブランドメッセージの作成
  - 製品パッケージの改良
- ・生徒が主体的に参加できるような作業学習
  - 販売体験、材料の購入、
  - 在庫管理、売り上げの計算 等にも取り組む
- ・金沢大学との連携
- ・作業所や企業との連携



プラタナスは  
わたしたちがこころを込めて作る  
作業製品のブランドです

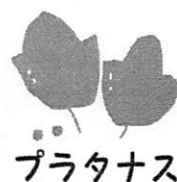
現在は、このコンセプトをもとにしながら、全体で次の2点を大切にしている。

- ・作業することの意味を生徒にもっと意識させたい
- ・様々な仕事が集まって製品になることを生徒に伝えたい

教師主体で始めたプロジェクトであったが、今年度は、プロジェクトを発展させて、生徒を主体にしたプラタナス委員会を立ち上げた。

# 作業学習

## プラタナス委員会



### 陶工房

季節の飾り  
たたらの皿づくり



鏡餅

お雛様



連携：  
石川県立伝統産業工芸館  
市内デパート内クラフト店

### 菜園工房

オーガニック野菜作り



金沢大学 角間の里の畑



連携：  
金沢大学角間の里

### 菓子工房

材料買い出し



クッキーの袋づめ



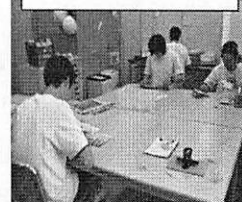
クッキーづくり



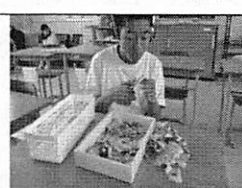
連携：  
金沢大学生生活共同組合

### チャレンジ工房

皿用袋・箱づくり



ベルマーク・エコキャップ



バリ取り



連携：K化学株式会社

### 販売活動

校内販売・金沢大学生協・附属高校開校祭・金大祭・学習発表会・研究会 など

図Ⅱ－３－８ 本校高等部の作業学習の概要

## （２）実践Ⅰ プラタナス委員会

### ①開始当初の様子

#### a. 教師の指導・支援の方向性

本校高等部では、２年前から、卒業式の前に作業学習で一年間頑張ってきたことをお互いにねぎらうために、市内のレストランで昼食会を行っている。昨年度は、各作業製品の販売収入の１割を集金し、昼食会の費用と東日本大震災の義援金に充てた。昨年度までは、教師が前面に出て、昼食会の計画や集金を行っていたが、今年度から生徒に運営を任せたいと考えて、今年１０月にプラタナス委員会を立ち上げた。

#### b. プラタナス委員会の主な活動

プラタナス委員会は、必要に応じて教師が招集し、昼休みの１２時４５分から１３時１０分の２５分間行うこととした。

主な活動は、次の４つとした。

- ・各工房で１ヶ月間の売上額をもとに、昼食会および義援金のための貯金額を教師とともに計算する。そして、プラタナス委員会で報告する。
- ・各工房から集まった貯金の合計額を計算する。
- ・プラタナス委員会で話し合われたことを、月１回の高等部集会で報告する。
- ・昼食会のための貯金の合計額をもとに、高等部全員で食事に行くことができる店を考えて、部集会で提案し承認を得る。

#### c. プラタナス委員の選出

委員会のメンバー（以下、プラタナス委員）を選出するにあたっては、各工房で教師と生徒とで話し合いを行って決めた。各工房の担当教師は、候補となる生徒を念頭に置きながら、話し合いに参加した。委員会の発足時は、産業現場等における実習の時期と重なり、欠席するプラタナス委員がいたので、代理の生徒を立てた。代理の生徒は、プラタナス委員の苦手な金銭管理や、計画立案・実行の部分を補うことができたので、そのままプラタナス委員として加わることを、教師から依頼した。その結果、プラタナス委員は、菓子工房のＷ男、Ｖ男、Ｊ男、陶工房のＳ子とＩ男、菜園工房のＵ子とＤ男、チャレンジ工房のＥ男の計８名の生徒及び２名の教師となった。

#### d. 実践

先に述べたように、プラタナス委員会は、必要に応じて教師が声をかけて、昼休みに開催した。一部のプラタナス委員にとっては、昼休みは他の生徒と過ごす大切な時間である。そのため、初めの頃は「教師に言われたから来る」という態度の生徒もいたが、回を重ねる中で、楽しい活動を自分たちで企画・運営できること、実際のお金に触れること、自分の得意なこと（計画立案、発表、金銭管理等）で貢献できることが分かってきて、生徒たちが意欲的になってきた。プラタナス委員会を開催することを伝える校内放送がかかると、プラタナス委員は互いに誘い合って、開始時刻に遅れずに、会議場所に集まるようになった。

各工房からの報告では、自分が携わる工房についての報告なので、どの生徒も自信を持って発表している。実際には、作業種目によって、毎月の売上額が大きく違うのだが、２年や３年の生徒は複数の工房を経験してその実態を知っているので、売上額の差については、誰も問題にしていない。各工房から報告される売上額が少なくても、プラタナス全体の利

益の向上として歓迎されているため、生徒たちは誇らしげに「今月の売上額はいくらで、昼食会のお金はこれだけ、義援金はこれだけです。」と報告している。

昼食会の会場について話し合った時には、食べ盛りの男子から「バイキングに行きたい」という提案がなされた。また、女子生徒は「（父がホテルのパティシエをしている）F子が『ケーキを食べてほしい』と言っているので、ホテルのランチバイキングに行きたい」と話した。プラタナス委員の話し合いをふまえて、行き先が決定した。そこで、ホテルのランチバイキングの一人当たりの値段に、高等部の人数をかけて、貯金の目標額とした。

## ②10月下旬から11月にかけての様子

### a. 教師の指導・支援の方向性

10月から11月にかけては、販売体験の機会が3回あり、そのうち2回は校外での対面販売である。この時期は、作業製品の売上額が多くなる時期でもあるので、昼食会に向けた取り組みとも関連させながら、生徒と一緒に各工房の作業活動での問題点とその改善策について話し合い、実行することをねらいとした。

### b. 実践

陶工房に所属する2年の1男は、「皿を成型しても、完成度の低いものは販売できないから粘土に戻す」ため、「陶工房では『不良品を作らない』という目標を立てた」と報告した。「不良品」という言葉を聞いて、菓子工房に所属する2年のJ男が「菓子工房でも、クッキー生地の中に混ざらない砂糖の粒が見つかり、製品にならない」ということを述べたので、「次回から、砂糖をふるいにかけてから使うようにする」ことを決めた。

11月上旬に金沢大学の大学祭で行った販売体験では、金銭のやり取りの中で計算やお釣りなどを間違えたようで、全体の売上額に対して3.4%の損失を出した。損失については、これまでは教師が処理していたが、今回はプラタナス委員会で話題に取り上げると、次の販売体験（学習発表会）では、「もっと注意してお金のやり取りをする」ことを確認した。学習発表会の販売体験でも損失が出たが、それは0.2%に留まった。教師は、金銭の扱いに関して更に注意を促すとともに、改善できた部分については評価した。11月末に売上額を計算した時には、生徒が「30円足りない」と言っていたが、生徒たちは何回も会計の計算を繰り返したり、お金を数え直したりしていた。その結果、生徒が数字の写し間違いを発見することができた。「金銭をしっかりと管理しよう」とする生徒の姿を見ることができた。

1年のC子はプラタナス委員ではなかったが、プラタナス委員の生徒たちが楽しそうに活動している様子に興味を示したので、プラタナス委員に誘うと、本人の希望で参加するようになった。C子がプラタナス委員になる前に、3年のV男に「どんなことをしているの？」と尋ねた時、V男は「プラタナス委員会は、難しいけど楽しい」と答えていた。実際、V男は、プラタナス委員会での話し合いに参加しているが、企画運営の話になると自分の意見をすぐにまとめて発言することは難しそうに見える。それでも、V男の発言からは、生徒たちがある目的に向かって、自分たちで意見を出し合い、話し合うという活動そのものが、楽しく充実しているのではないかと推測される。

## ③まとめ

はじめは教師主導で行われていたプラタナス委員会であったが、回を重ねるうちに、生徒たちが主体的に活動に参加するようになってきた。それは、教師が方向性や毎回行う会

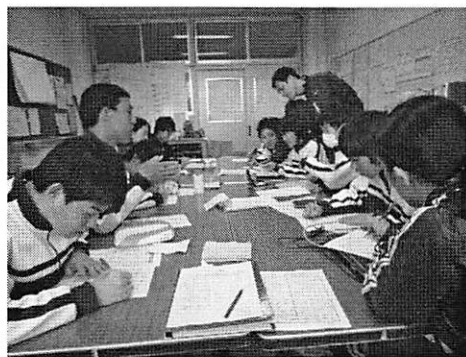


の持ち方を示したり、プラタナス委員会の中で様々な活動があり、その中で自分の得意な面を活かすように役割分担をしたりしたからであると考えられる。

また、生徒たちの話し合いの様子からは、みんなで一つの目標に向かって取り組む時の、勢いがある高揚した雰囲気を快く感じていると推測される。その中で、楽しいことを自分たちで決めている自分、代表として任せられている自分、話し合いの場で意見を考え、発言している自分を「かっこいい」と感じているようにも見える。

これらの姿からは、生徒たちが、「他者と関わりながら活動したい」という思いや、「集団の中で自分が価値ある存在として認められたい」という思いを潜在的に持っているのではないと思われる。この年頃の生徒なら、今までの生活上や学習上の経験をもとに、ある程度満たしている思いであるが、本校高等部の生徒は、これまでに経験自体が不足していたり、失敗経験をしていたりすることにより、自己有用感をあまり感じなかったものと思われる。本研究で「生徒の思いを大切にする」という時には、生徒が言葉で表したことや、生徒の行動から推測されたことをもとに、生徒の思いを汲み取ってきたが、他者との関わりや集団の中で満たされたいという思いにも、目を向けていく必要がある。

作業学習の観点からは、生徒たちが、みんなで話し合っただけ決めた目標に向かって、生産性を上げるように作業活動を改善したり、より良いものを作って販売したりすることで、自分たちに良いかたちで還ってくるという体験を通して、作業活動ひいては働くことに関する意識を高めることにつながった。また、良いことだけでなく、失敗も生徒たち自身に返すことで、問題点や課題について生徒自身が考えることができるようになってきた。プラタナス委員会の実践を通して、私たち教師は、生徒に対して、失敗をなるべくさせてないようにしてこなかったか、必要以上の支援をしてこなかったかを改めて問い返している。



プラタナス委員会の様子



高等部集会での報告の様子

### (3) 実践Ⅱ 作業学習での実践

ここでは、各工房で今年度取り組んだ実践について報告する。

#### ①菓子工房（クッキー製造）

##### a. 作業の内容

このグループでは、クッキーの生地を作り、焼くまでの作業を行っている。

##### b. 生徒の実態

今年度は、1年男子1名、1年女子1名、2年男子1名、2年女子1名、3年男子2名の計6名の生徒と教師1名で行っている。理解力や作業能力が高い生徒が、6名中5名である。2年のJ男は、対人関係に課題があるが、作業能力が高く、クッキーを切る仕事を一人で任せることができる。また、5名の生徒はクッキーの生地づくりを行っており、4名は教師が確認のみ行うだけで、作業を進めることができる。1名は要所で支援を必要としている。

##### c. 教師の指導・支援の方向性

理解力が高い生徒が多いので、「〇〇ができるようになる」といった作業に必要な技能の習得に関する目標だけでは、すぐに達成されると思われた。本人が作業に対する意欲を持ち続けたり、自分で目標を持って取り組んだりできるように、作業に対して生徒自身が意味づけできるような支援を行いたいと考えた。

##### d. 実践

1学期には、仕事を覚えたり立ち仕事に慣れたりするために、「できるだけ多くクッキーの生地を作る」ことを作業活動の目標にした。また、「作業量には反映しない準備のための一連の仕事や計量、後片付けも行っていきたい」と考えて、クッキー作り全体に関わる仕事に取り組むことを評価した。

2学期の初めに、生徒たちがクッキー作りの作業に見通しを持てたと思われたので、生徒一人一人の目標を決めることにした。目標設定にあたって、教師は、生活機能モデルをもとにした作業目標シート（図Ⅱ-3-9参照）を作成し、それをもとに生徒一人一人と懇談をした。「できる活動」「している活動」「自分が得意なこと」「教師に手伝って欲しいこと」等、項目をあげて生徒に尋ねていくと、J男以外の生徒5名が具体的に答えていた（J男に関しては、事例Ⅰを参照のこと）。目標設定の際には、自分が苦手なことを目標にする生徒、得意なことを目標にする生徒、クッキーを切る仕事をしてみたいと要求する生徒等がいた。生徒の思いに加えて、教師からも「こうなって欲しい」という思いを伝え、両者の思いをもとに、生徒の同意を得たうえで目標を設定した。また、懇談の際には、「目標を達成するために、教師ができること」も尋ねた。懇談の結果は、作業日誌の形式に入れ、自己評価、教師による他者

作業目標設定シート	
教師作成	V男
大目標	有意義に趣味を楽しんで就労のための勉強を頑張る
小目標	①趣味の時間を広げる ②仕事に必要な知識を身につける ③友達と遊びに行く方法を学ぶ
支援なしで「している活動」	・自分で考えて、手を洗う ・車庫に置いておくクッキー生地を作る ・必要な道具で作業をする ・材料の分量を資料を見て調べる ・正確に計量する ・なくなる前に材料を補充する ・洗い出しをしない ・洗剤の量を約量に計り洗剤を使う
支援ありで「できる活動」	・道具の片付け、準備をはじめる ・勝手に仕える作業を遊び時間や暇をする ・丁寧な言葉で報告や質問をする ・決められた時間内にペース配分して作業する ・仕事が終わったら次の仕事をする ・わからない事や、次にするべき仕事を尋ねたり、確認したりする ・計画の破綻など、次の作業を想定し準備をしたり、手伝いを求めるたりする
本人が頑張ろうとしていること	・仕事のできる男になろうとしている ・目標されたことを次の作業につなげようとする
本人の強み、良さ	・一定の時間作業に集中する体力がある ・丁寧な態度や言葉で相手と接することができる ・丁寧に作業に取り組む ・手洗いや方法を覚えたと、正確に取り組む
現場実習での成果と課題	・長時間の集中力はよい(1年後期 スーパー) ・少し大きく、仕事はきつと伝えた後でできた ・たった1人での作業で手洗いや準備ができた(2年前期 1工場①) ・正確な作業、完了の報告もしっかりとできたが、同じ作業が長く集中力が落ちる ・手洗いが器用で、飲み込みも早く、理解力がある ・仕事に対する意欲が高い ・食器が洗剤で洗える(2年後期 1工場②) ・作業環境を度外視するなどの課題はない、効率の良い(3年前期 レンタルビデオ) ・終わったことと、しなければいけないことに対してはできている ・力仕事や作業効率が課題(3年後期 食品加工)
教師からみた課題	・報告の言葉が単語、もしくは文章として出てこない ・すべてについて報告をしようとする所がある ・全体の様子から自分のするべき仕事を判断するのが難しい時がある
支援策	・その時々での行動が、相手にどのような印象を与えるか説明していく ・指示や注意について、その背景も含めて説明していく ・仕事について、なぜそのタイミングで行うか説明したり、自分で気づくための方法を伝えていく ・作業が終わったら、教師や友達と相談して次の仕事を探すことを手伝う

図Ⅱ-3-9 作業目標シート

評価、教師の支援に対する生徒の評価を記入できるようにした。

また、2学期に実施予定の3回の対面販売に向けて、工房としての目標を決めた。昨年度のクッキーの売上額を生徒たちに提示すると、生徒たちは「昨年度の売上額を越す」という目標を決めた。各販売会の後には、目標の金額と今年度の売上額とを比較して、生徒と一緒に評価した。

#### e. まとめ

これまで、菓子工房（クッキー製造）では、生徒に作業日誌を付けさせたことがなかった。クッキー製造担当の教師が、仕事をする上で必要な態度等（「あいさつができる」等）について○や×で評価することに意味を見出せず、代わりに生産性を上げることで、それに変えようとしたからである。仕事をする上で必要な態度等を軽視したのではなく、生徒が自分自身の目標として、どの程度自覚できているのかを把握せずに評価を行うことに、意味を見出せなかったためである。生徒と話し合っただけで目標を決めるのは、生徒が目標を自分自身のものとすることで、評価を意味のあるものにするためであり、このことによって、作業日誌の意味を見出すことができた。

4月当初に、生徒一人一人の目標を立てようとしたが、作業が始まったばかりの頃は、生徒にとっても教師にとっても、生徒の内面にせまる目標を立てることができなかった。しかし、生徒自身が新たにに取り組む作業活動の経験もなく、作業の見通しも持てない時期に、自分の目標など設定はできないのは当然である。4月当初の目標を「仕事を覚える」「工程を覚える」という目標に設定し直したのは、遠回りに見えたが必要なことであった。生徒ができること、頑張れることについて、生徒も教師も分かったうえで、初めて生徒と共に目標設定およびその評価について話し合うことができた。

また、作業活動と同じで、目標を立てる経験がなければ、生徒はいつまでも目標を立てられない。作業日誌の記入に関しては、まだ記入の際に戸惑う生徒がいるが、目標の設定の仕方や作業日誌の形式の改良を重ねるとともに、自分を評価する、教師の支援について評価する体験を積み重ねることで身につけていきたい。

生徒一人一人の目標を立てることができたが、クッキー製造グループ全体の目標は、教師が「協力し合って作業し、より良いものをたくさん作ろう」とした。今後、生徒同士が関わられるようなしかけや、自分たちで責任を持って作業時間内に運営してできるような体制を作る中で、共に働く仲間に助けを求めたり、補い合い助け合ったりして作業ができるような支援を考えていきたい。

## ②菓子工房（パッケージ）

### a. 作業の内容

このグループでは、菓子工房（クッキー製造）で出来上がったクッキーを作業室に運ぶことから、袋に詰めて出荷するまでの作業を行っている。

### b. 生徒の実態

今年度は、3年男子2名と教師1名で行っている。W男は、理解力が高く、初めて行う仕事や予定の変更に対しても臨機応変に対応できる生徒で、このグループの中心となっている。誰にでも穏やかに接することができ、他の生徒たちからとても慕われているが、本人は自分のことを「存在感の薄いダメ人間」と評価している。一緒に作業を行っているR

男は、同級生のW男を「僕の親友」と思っており、今年度はW男と同じ作業グループになったことで、作業活動に前向きに取り組んでいる。

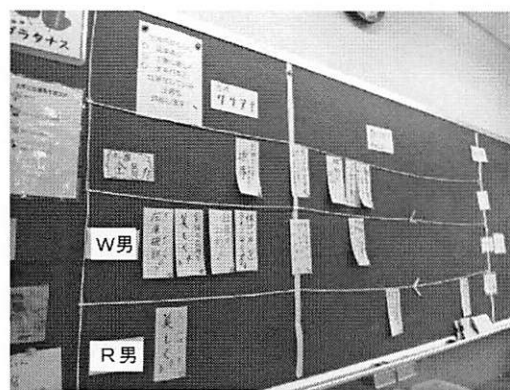
### c. 指導・支援の方向性

仕事内容は一年間を通して大きな変化がないので、作業の流れを覚えると、生徒自身が見通しを持って行うことができる。そこで、作業内容を一通り覚えたら、教師からの指示で動くのではなく、その日の作業の流れを自分達で考えて進めていくことをめざした。「効率よく仕事をするために、どうすればいいのか」をW男が自分で考えて気付けるように声をかけ、教師の指示を極力減らすように心がけた。

### d. 実践

W男をパッケージグループのリーダー、R男を得意な仕事である配達・シール貼りの主任に任命し、自分の作業に対して責任を持って行うように意識づけを行った。そして、W男が、全体を把握して仕事の流れを自分で考えながら進めていくことをねらい、「リーダーを中心に、効率よくテキパキと仕事ができる工房を目指す」という年間目標で取り組むことを生徒と一緒に決めた。

年間目標を達成するために必要なことを、日々の小さな目標として立てた。そして、短冊状の紙に書いて黒板に貼ることにした(写真参照)。作業中に意識できるようにするためと、みんなで目標を共有できるようにするためである。毎回、作業活動の始めに短冊状の紙に書かれた目標を確認し、目標を達成ゾーンに移動させることを目指して作業活動に取り組んでいる。作業終了後には、反省会を開き、振り返りを行っている。



パッケージ班の目標の掲示

日々の目標は、基本的には自分達で設定しているが、必要と思われる時には、教師から少し高めの目標を提示し、生徒たちの理解を得たうえで設定している。例えば、W男には「効率よく作業を行うための工夫をする」という目標を教師から提示し、本人も納得して取り組んでいる。

### e. まとめ

日々の目標を黒板に貼っていくことで、生徒が自分自身の目標を意識しやすい取り組みになった。また、改善すべき点がでてきた時には、生徒から積極的に目標を提示し、失敗を前向きに捉え、ステップアップしようとする姿勢も見られるようになった。R男は、口頭からの指示は入りにくい、短冊状の紙に書いて黒板に貼ることで、目標達成ゾーンに短冊を移動することを目指し改善を意識している。W男は、効率よく仕事を行う方法を提案するようになった。従来やり方が定着していた教師にとっては「なるほど」と思うことも多く、W男の提案を取り入れて作業環境の改善を行っている。認められることで自分に自信を持ってきたW男は、自分の判断で仕事を行う場面が増え、他の生徒への評価も積極的に行うようになった。(W男については、事例Ⅰも参照のこと)

## ③菓子工房(材料購入・製品搬入)

事例Ⅱ(114～116 ページ)で述べる。

#### ④陶工房

##### a. 作業の内容

この工房では、主に「たたら皿づくり」を行っている。粘土を塊から切り分け、麺棒とたたら板で均一な厚みに伸ばし、型紙に合わせて切り、石膏型に沿わせて皿の形に整える作業である。また、鏡餅や雛人形といった季節の飾りも作っている。

##### b. 生徒の実態

今年度は、1年女子1名、2年男子2名、2年女子2名、3年男子1名、3年女子1名の計7名と教師2名で行っている(生徒のうち、2年女子1名は、午後のみ所属している)。すべての工程を一人でできる生徒は3名、粘土を伸ばす工程まで行うことができる生徒は3名である。午後のみ所属している生徒は、乾いた粘土を砕いて細かくし、再生する材料づくりを行っている。

##### c. 指導・支援の方向性

皿を美しく仕上げる技能の習得だけではなく、仕事には様々な要素があることを理解して欲しいと願い、キーワードを用いて努力目標を設定する。

##### d. 実践

年度初めに、働く上で大切な10項目(挨拶や言葉遣い、連絡・報告、身だしなみ等)を挙げて、生徒に提示している。1学期には、工程を理解し、適切な製作順で作業を行えるように教師が指導や支援を行っていく中で、生徒自身が良否の判断をし、それを報告しながら進められるようになっていく。生徒たちは、粘土の量の目安、道具の使い方、手のひらや指の使い方、伸ばし方や伸ばすコツ、報告の大切さ等を体験しながら学んでいる。

高2のI男は、技能的には問題なく皿づくりを行えるのだが、態度が横柄に感じられ、時には教師の話に納得できずに腹を立てた表情をしたり、外方を向いたりすることがあった。6月に行った産業現場等における実習でも、実習先から働く態度について指摘されることが実際にあった。それを受けて、障害特性ということでは済まされない部分であると判断し、作業に対する意欲・態度について指導を行うことにした。

そこで、陶工房の生徒全体に対して、「真摯」という言葉を使い、度々話をした。「真摯」という言葉は、生徒にとってなじみのない言葉であったが、「まじめでひたむきであること」という意味を機会のある毎に話題にして、その大切さを感じられるように心がけた。

現在は、I男の態度が改善され、陶工房全体で気持ちよく作業を行うことができている。I男の作業の態度が改善されたので、I男と一緒に新たな目標についての話し合いを行い、「工房全体に気を配り、製作がスムーズにできるようにする」という目標に更新した。I男はプラタナス委員にもなっており、とても意欲的に活動を行っている。

また、校外の方から陶工房の製品を評価されたことで、市内のデパートにあるクラフトショップや石川県立伝統産業工芸館での製品販売ができるようになった。生徒と一緒に直接に売り場へ行き、見学や搬入なども行っている。売り場の方と話をすることで、お店の方に作り手の生徒のことを理解してもらうことができた。生徒にとっては、本校保護者や関係者だけでなく、一般の方々にも認められ評価されることで、作業活動に対する意欲や達成感につながっている。プラタナス委員会で陶工房の代表者が売り上げ報告を行う際に、他の工房の売上高や発表を意識して発言していることから、意欲や達成感を感じていることを推測することができる。現在は、「製品をもっと多く搬入したくても、製作が追い付

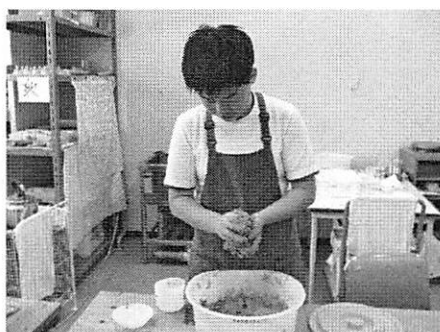
かない」という状況で、プラタナス委員会で挙げた「不良品を作らない」という目標を生徒たちが意識して取り組むようになった。年度当初に、「工程を理解し、適切な制作順で作業活動を行う」という目標から、「工房全体で効率よく製品を作り、製作数を増やしていく」という目標に向かって、生徒自身が考えながら作業活動に取り組むようになってきた。

陶 工 房 作 業 日 誌		天気
6月 21 日 (木)		曇り
今日の作業内容 たたら <sup>たたら</sup> の皿作り		
今日の目標 いい皿に <sup>いい</sup> 作る90~1002		
反省	◎ ○ ×	生徒 教師
意欲はあったか		○ ○
服装・身なりはよかったか		○ ○
時間は守ったか		○ ○
態度・ことばづかい良かったか		△ ×
根気強く作業できたか		○ ○
目標は達成できたか		○ ○
生徒のひとこと さき <sup>さき</sup> ようを <sup>しん</sup> はした <sup>しん</sup> 真 <sup>ま</sup> 幸 <sup>しん</sup> 手 <sup>て</sup>		
教師より しん <sup>しん</sup> な <sup>しん</sup> 姿 <sup>しん</sup> 勢 <sup>しん</sup> で <sup>しん</sup> 作 <sup>しん</sup> 品 <sup>しん</sup> が <sup>しん</sup> でき <sup>しん</sup> る <sup>しん</sup> 方 <sup>しん</sup> に <sup>しん</sup> お <sup>しん</sup> か <sup>しん</sup> し <sup>しん</sup> て <sup>しん</sup> お <sup>しん</sup> い <sup>しん</sup>		

I 男の作業日誌（6月）

陶 工 房 作 業 日 誌		天気
9月 25 日 (火)		曇り
今日の作業内容 たたら <sup>たたら</sup> の皿作り ゆうやく <sup>ゆうやく</sup> かけ <sup>かけ</sup> しあ <sup>しあ</sup> げ <sup>げ</sup>		
今日の目標 じゅん <sup>じゅん</sup> じょ <sup>じょ</sup> せ <sup>せ</sup> つ <sup>つ</sup> く <sup>く</sup> り <sup>り</sup> か <sup>か</sup> た <sup>た</sup> を <sup>を</sup> た <sup>た</sup> だ <sup>だ</sup> く <sup>く</sup> ー <sup>ー</sup> く <sup>く</sup> 3		
反省	◎ ○ ×	生徒 教師
意欲はあったか		○ ○
服装・身なりはよかったか		○ ○
時間は守ったか		○ ○
態度・ことばづかい良かったか		○ ○
根気強く作業できたか		○ ○
目標は達成できたか		○ ○
生徒のひとこと しあ <sup>しあ</sup> げ <sup>げ</sup> を <sup>を</sup> しあ <sup>しあ</sup> した <sup>した</sup>		
教師より こ <sup>こ</sup> は <sup>は</sup> う <sup>う</sup> が <sup>が</sup> も <sup>も</sup> 良 <sup>良</sup> い <sup>い</sup> な <sup>な</sup> ら <sup>ら</sup> ず 作 <sup>作</sup> 品 <sup>品</sup> 入 <sup>入</sup> る <sup>る</sup> へ <sup>へ</sup> ん <sup>ん</sup> の <sup>の</sup> 予 <sup>予</sup> め <sup>め</sup> に <sup>に</sup> 作 <sup>作</sup> 品 <sup>品</sup> を <sup>を</sup> しあ <sup>しあ</sup> げ <sup>げ</sup> し <sup>し</sup> て <sup>て</sup> お <sup>お</sup> い <sup>い</sup> し <sup>し</sup> な <sup>な</sup> く <sup>く</sup> ゆう <sup>ゆう</sup> やく <sup>やく</sup> も <sup>も</sup> 全 <sup>全</sup> 部 <sup>部</sup> 片 <sup>片</sup> は <sup>は</sup> に <sup>に</sup> く <sup>く</sup> れ <sup>れ</sup> ま <sup>ま</sup> し <sup>し</sup> た <sup>た</sup> ま <sup>ま</sup> り <sup>り</sup> お <sup>お</sup> い <sup>い</sup> し <sup>し</sup> な <sup>な</sup> く <sup>く</sup>		

I 男の作業日誌（9月）



真摯に作業に取り組む I 男



石川県立伝統産業工芸館での販売の様子

#### e. まとめ

私たちは、日々の作業学習を通して、技能の習得だけでなく、作業に対する意欲や態度も育てたいと考え、取り組んでいる。今年度は、「真摯」というキーワードを用いて、実際の作業の様子と結びつけながら、繰り返し生徒に伝えてきた。その結果、生徒の作業に対する意欲や態度に良い変化が見られるようになり、キーワードを用いることが有効であると感じた。

また、校外で製品を販売する機会を得て、多くの方に製品を購入していただいているこ

とで、生徒が自信や達成感を感じたり、「より良い製品を作ろう」という目的意識を持ったりすることにつながった。

今後も、生徒が作業に対する意欲や態度を身に付けられるように、引き続き取り組んで行きたい。

## ⑤菜園工房

### a. 作業の内容

この工房では、主に、学校と大学にある畑で、野菜作り（スナップエンドウ、長ネギ、里芋、人参、大根等の栽培）を行っている。その他、椎茸の栽培や、校内で集めた枝葉等を粉砕し、堆肥を作る活動等も行っている。

### b. 生徒の実態

今年度は、1年男子2名、3年女子1名の計3名の生徒と教師1名で活動を行っている。1年のD男は、数回行った活動については、口頭での指示で理解することができる。また、言語表出は得意ではないが、よく気が利く。3年のU子は、何度も繰り返し経験したことは一人でできるが、しばらく取り組まないと忘れてしまうことがある。1年のG男は、工程の少ない作業であれば続けて行えるが、工程が多くなると注意の集中や持続が難しい。

### c. 指導・支援の方向性

栽培する野菜の種類とその時期、使用する道具とその使い方等の作業内容について覚え、見通しを持って作業に取り組むことを目指した。また、生徒一人一人の興味・関心や得意なことをもとに、役割を分担して取り組めるようにした。

### d. 実践

4月当初は、活動の見通しを持つこと、丁寧な言葉で報告を行うことに重点を置き、作業学習での目標として黒板に掲示した。活動の見通しを持つために、年間に栽培する野菜や道具について、写真入りの本やテキストで学習した。また、報告の仕方についても、プリントや掲示物で確認した。毎回の作業の前には、その日の作業内容と目標について、全員で視覚的に確認してから、作業に取り組んでいる。

作業を繰り返す中で、生徒一人一人の得意なことが見えてきた。例えば、D男は、道具の準備や片付けに自信を持って取り組んでいる。G男は、石拾いや蕪切りを続けて取り組んでいる。そこで、生徒一人一人と話し合いながら、菜園工房での役割分担を決めた。そのことで、作業活動に意欲的になったり、長時間集中が保てるようになってきたりする姿が見られるようになってきた。生徒の自己評価と教師の評価とが近づくようになってきた。活動の見通しがついてきたようにも感じた。

1年のD男は、1学期は教師や他の生徒と一緒に野菜の栽培に取り組み、野菜が実って収穫できるとうれしそうにしていた。徐々に畑仕事を覚えて、自信を持つようになると、野菜の収穫や袋詰めを一人で行えるようになってきたり、既習の活動では、どの道具が必要かを考えて準備できるようになってきたりしてきた。10月のある日、午前の作業終了時に午後の作業内容を伝えておくと、D男は、午後の作業が始まる前に、午後からの作業に必要な道具を全部揃えていた。そこで、D男と懇談を持ち、教師から「できるようになった仕事を一人で行えるようになって欲しい」という話をした。その後、D男が作業日誌に書く目標が『『終わりました』と報告する』という目標から、「一人でねぎの根っこを切る」、「皮を



むく」等の目標へと変わっていった。

#### e. まとめ

他の工房と違い、野菜の栽培は毎回工程が異なることが多く、収穫までに時間がかかることから、見通しを持って作業に取り組めるような手だてがより一層必要であった。そして、徐々に仕事を覚える中で、生徒が自信を感じたり、自分に合った役割を担ったりすることで、自ら活動に取り組むという意識が芽生えている。報告の態度が良くなったり、休憩時によく話すようになったりする姿も見られた。目標を立てることについては、今年度の生徒は「教師が大切にしたい」と伝えたことをもとに、毎回同じ目標を立てることが多かったが、少しずつ具体的な目標を立てるようになりつつある。毎時間の目標設定についても引き続き取り組んでいきたい。

みんなの目標		前期 9月16日	後期 9月22日
U子	しっかり返事をする		もっと仕事をやるようにがんばります
D男	終わりました」と報告をする		もっと丁寧な作業をしたいと思います
G男	野菜や道具の名称をおぼえる		石のういもがんだら わらわらりをぶつとづける

生徒一人一人が記入した目標の掲示



一人で長ネギを収穫するD男

### ⑥チャレンジ工房（梱包袋作り）

#### a. 作業の内容

「c. 指導・支援の方向性」で述べる。

#### b. 生徒の実態

今年度は、1年男子1名、1年女子1名、2年男子2名、3年男子1名の計5名の生徒と教師1名で活動を行っている。（生徒のうち、1年女子1名は、午後のみ所属している。）このグループに所属している生徒は、Ⅱ類型の教育課程を履修している生徒がほとんどであるが、教師の個別対応は必ずしも必要としていない。仕事に取り組もうとする意欲がないわけではないが、指示待ちとなることが多く、長時間継続して取り組む作業にも従事した経験がなかった。仕事に難しさを感じるポイントはそれぞれ違っており、工程数が多いことに難しさを感じる、精度に関して良し悪しの判断が付きにくい、見通しが持てないと作業に取り組めない等、様々である。

#### c. 指導・支援の方向性

年度当初の時点で設定されていた作業内容としては、ベルマークの切り取り・分類・整理やバリ取り等であったが、仕事の量が少なく、休憩の合間に毎回違う内容に少しずつ取り組むという状況であった。そこで、生徒の実態に合わせた新しい作業内容を考案することを支援の最優先事項とし、その後に指導を充実させることにした。新しい作業内容は、分業できることと、ルーティン化できる量を確保できることを条件とした。

構造化によって達成可能な課題に長期間取り組める環境を整えることで、生徒に「作業

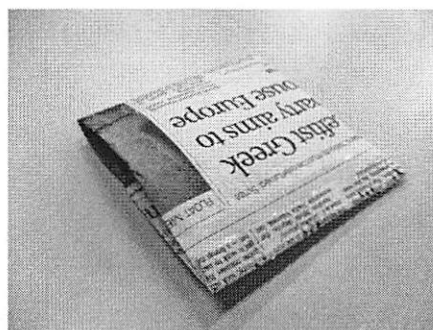


に取り組める自分」を意識させ、その基礎の上にプラスアルファを求めていくという方針で指導を行う。また、4～5名の生徒に対し、教師は1名なので、生徒が必要に応じて教師のもとへ来るようにし、教師は定位置で報告や依頼を待つようにした。こうすることで、指導者人数の不足を逆手に取り、主体的に行動する力の育成を目指した。

#### d. 実践

最初に取り組んだのは、陶工房で作っている皿用の箱作りである。技術面は治具で補い、分業によって生徒一人一人の作業をパターン化することで、長時間の作業でも最後まで取り組むことができるようになった。しかし、材料コストが高く、製造→販売→製造の循環がなければ作業を継続することができなかった。実際に注文があった数を生産するには、時間的に2週間程度で十分であったため、新たな作業種を考案する必要に迫られた。

次に取り組んだのが、新聞紙で作る皿用の梱包袋作りである（写真参照）。この製品も注文数は少なかったが、材料がセロテープと古新聞とシュレッダーのくずという廃材主体であったため、材料コストが安く、販売できなくても製造を継続することができた。この題材を導入することで、同一の課題に長期間取り組める環境が完成し、開始のあいさつから、後片付け、振り返りまで、毎回同じ流れで授業を行うことができるようになった。



皿用梱包袋

2年のP男は、教師の指示待ちになることの多い生徒だが、授業で使った洗濯バサミの片付けは自分の仕事だと認識して、自主的に片付けを行う姿がみられるようになった。1年のE男も指示待ちが多かったが、繰り返し活動に取り組むことで、自主的に仕事をもらいに来て、報告するという活動を新たにできるようになった。これらについては、行動をパターン化できたことで、何をすればいいのか理解できるようになったことが、主体的な活動を引き出す要因になったと思う。

また、どれくらい働いたのかということを数値化できるようになり、生産数を比較できるようになったことで、自己評価の基準を示すこともできた。現在では、生徒は「どれだけ仕事をしたのか」という問いに答えられるようになった。

#### e. まとめ

このグループの生徒は、これまでの作業学習では、「指示されたら仕事をする」という感覚だったのではないかと感じる。現在も指示された仕事をしているのだが、指示を受けに行くというプロセスを経ることで、「させられる仕事（受動的）」から「している仕事（能動的）」になり、彼らにとっては全く意味の違うものとなっているのではないだろうか。また、作業活動に取り組んでいる時間が増えたことから、生徒の意欲を引き出せていると感じている。実際に、精神的に不安定になりやすい生徒が、作業に取り組むことで落ち着いていられるようになり、学校生活全般で落ち着きを取り戻した事例もあった。

今後の課題としては、評価を生徒が意識できるようにしていくという点である。まずは、「今日はたくさん作った」というような自己評価をできるようになるということが目標である。そこから「〇〇さんは頑張っている」というような相互評価につなげていきたい。

## ⑦チャレンジ工房（バリ取り等）

### a. 作業の内容

プラスチック製の材料のバリ（不要な部分）を取る作業に取り組んでいる。プラスチック材料は、鋳物作りで鋳物を固定するために使用するものである。現在は、1人の生徒（L子）が手でバリを取った後、材料に少し残ったバリをもう1人の生徒（X男）が爪切りを使って取るという流れで行っている。

### b. 生徒の実態

今年度は、2年女子1名（L子）、3年男子1名（X男）の計2名が午前中のみ所属している。午後は、L子は陶工房で、乾いた粘土を砕いて細かくし、再生する材料づくりを行っている。X男はチャレンジ工房（梱包装袋作り）で、英字新聞を折る作業を行っている。

L子は、缶つぶし等の粗大な動きでの作業を得意としている。一方、X男は、手先が器用で、小さな事物の認識が得意である。2人とも、周囲の刺激の少ない環境であれば、20～30分間程度作業に取り組むことができる。

### c. 指導・支援の方向性

生徒の得意なことを活かして、落ち着いて作業に取り組めるようにしたい。

### d. 実践

ここでは、主にX男との実践について述べる。毎時間、X男と作業学習を始める前には、スケジュール確認を欠かさずに行っている。これは、高等部に入学した時から継続して行っていることである。X男専用のホワイトボード（写真参照）を用意し、まず教師からその日にしたい作業内容と作業量を伝える。そして、X男は自分で可能であると判断した場合はそのまま受け入れ、難しいと判断した場合は「いや」と言ったり、作業内容を示したカードをボードから外したりしている。お互いの思いを伝え合ったうえで交渉し、その日の作業内容と作業量を決定することで、落ち着いて作業に取り組むことが多い。また、X男は、その日の作業後に教師に印刷して欲しいものをリクエストし、作業内容や作業量と同様に、教師と交渉している。

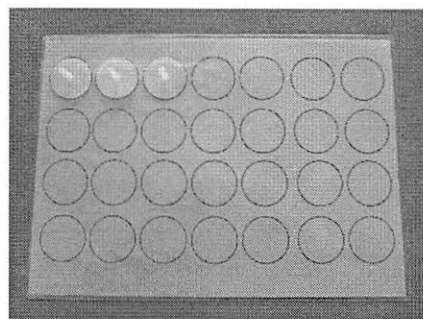
バリ取りでは、年度当初は作業量の見通しを持てるようにプレート（写真参照）を用意し、爪切りでバリを取ったプラスチック材料をきれいに並べている。午前中で3シート分（72個分）仕上げることを目標にしているが、日によって実際に取り組んでいる作業量はまちまちである。現在は、プレートを使う必要がなくなり、作業量も教師と一緒に200個仕上げることを目指して取り組んでいる。

### e. まとめ

今年度は、今まで以上に、環境設定を整えたり、生徒とのやりとりを意識して取り組んだりすることにより、生徒が落ち着いて作業に取り組むことにつながった。今後は、生徒がより自主的に作業に取り組めるように、引き続き改善を続けていきたい。



スケジュール確認ボード



バリ取り用のプレート

#### (4) 実践Ⅲ 学習発表会（ステージ発表）

今年度のステージ発表において、高等部では作業学習に関することを取り上げることにした。

##### a. 教師の指導・支援の方向性

ステージ発表に向けた一連の取り組みを通して、生徒たちが日々の作業活動について振り返りながら、自分について見つめたり、他の生徒を意識したりすることをねらいとして、指導・支援を行っていくことにした。

##### b. ステージ発表の構成

発表の構成は、以下の通りである。

- ・作業学習の全体像がイメージできるようなビデオ（生徒によるナレーション）を上映する。
- ・工房ごとに登壇し、作業内容や生徒一人一人が日々の作業活動の中で頑張っていることについて、スライドやビデオに合わせて、プレゼンテーションをする。発表の形式は、全体で統一した形式にするが、生徒の実態に応じて、作業の様子を撮影した写真やビデオの上映を多くしたり、生徒が自分の言葉で話す量を多くしたりする。
- ・最後に、全員が舞台上に集合し、プラタナスのブランドメッセージを唱和する。

##### c. 実践

###### (a) 日々の作業活動の振り返りから、発表原稿作成まで

まず、高等部集会でテーマと発表内容について生徒に提示した後、工房・グループごとに分かれて、それぞれの発表内容について考える時間を設定した。高等部の生徒一人一人が日々の作業活動で頑張っていること等に焦点が当たるように、各工房・グループで以下のような活動を行った。

- ・日々の作業活動を写真やビデオで振り返る。
- ・日々の作業活動で自分が頑張っていることや自信のあること、得意なことを考える。
- ・発表用の写真を選ぶ。適当な写真がなければ、その場面の写真を教師に撮ってもらうことを依頼する。
- ・作文を書く。発表原稿にするために、発表しやすい言葉や言いまわしを考える。
- ・生徒一人一人の原稿をつなげ、調整しながら、工房としてのまとまりを持たせる。

（発表用のスライドは、教師が中心となって作成する）

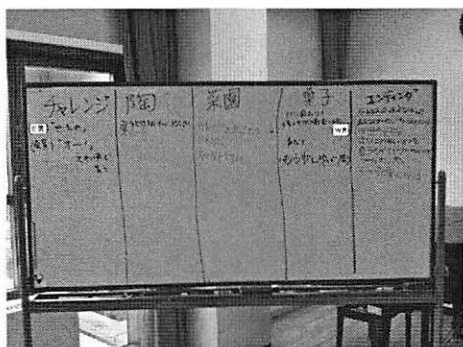
- ・工房ごとに、発表時のBGMを考えて、話し合って選ぶ。

生徒たちは、日々の作業活動を振り返ったり、発表原稿をまとめたりすることを通して、作業活動での自分の役割や頑張っていること、他の生徒の役割や頑張っていることについて、改めて確認する機会となった。

###### (b) ステージ練習から発表当日まで

最初の全体練習では、スライドを見ながら原稿の読み合わせを行った。生徒たちは、自分が現在所属する工房や過去に所属した工房以外には関心が薄いようであるが、他の工房やグループに対して、「知ろう」とする意識を持って見る機会になった。生徒たちからは、「他の作業についても、どのようなことをしているかが分かった」、「この仕事には、こういう意味があったんだ」「機会があれば、〇〇工房の仕事をしてみたい」等の意見が挙がっていた。

全校で行ったリハーサルの日、振り返りの活動を行った。リハーサルの映像を見てから、工房・グループごとに分かれて、発表当日に向けて意見交換を行った。「声が出ていなかった」、「客席を向いて話していなかった」等の意見が生徒から挙がり、それに賛同する意見もあった。これまでの舞台練習の中で、教師からそのような指摘は受けていたが、実際に映像を見たり、話し合いを行ったりすることで、生徒自身が実感したようであった。



意見交換の際に各工房から出た意見



ステージ発表当日の様子

### (c) 事後の振り返り

学習発表会を終えた後にも、当日の映像を見たり、ワークシートを用いて振り返りを行ったりした。生徒たちは、「緊張したけど前を向いて頑張りました」等の自分の発表についての感想や、「〇〇さんの皿作りの発表のセリフがよかった」「〇〇さんの大きくはっきりした声がよかった」等の他の生徒のよかったところを評価する感想、「お母さんから、『すごくがんばったね』と言われた」等と、家族や知り合いの人からほめられたりアドバイスをもらったりしたこと等について記入していた。

### d. まとめ

過去の事例研究において、特定の生徒が各工房の仕事を体験し、様々な仕事や役割について知る活動を行ったことはあったが、高等部全体で意識的にそのような取り組みを行ったのは、今回が初めてであった。日々の作業活動では、自分が取り組むべき目の前の作業に集中していて、工房全体やプラタナス全体に目を向けることはなく、作業学習の授業時間内で活動を設定することも難しかった。今年度は、ステージ発表に向けた活動の機会を利用することで、まとまった活動を行うことができた。ステージ発表の内容は、毎年検討しているので、今回のような活動を毎年行うことは難しいが、数年に一度行ったり、別の活動の機会を設けて行ったりする等、今後どのように活動の機会を確保するかが課題である。

学習発表会に向けた一連の活動が、その後の作業活動にどのように影響したかは、まだ十分に検証できていないが、プラタナス委員会の活動や、月1回の高等部集会での報告を重ねていく中で、生徒の発言や行動をもとに検証していきたいと考えている。

(5) 事例Ⅰ 生徒同士の相互評価をもとに、自己認識や自己評価を高めることを目指した事例

(高等部2年J男：菓子工房 クッキー製造)

(高等部3年W男：菓子工房 パッケージ)

①生徒の実態

a. J男(高等部2年)の実態

- ・ 中学部から本校に在籍している。
- ・ 失敗することが嫌で、他者から指摘されることを嫌う。
- ・ 周囲の人間の失敗やできていない部分にはよく気づくが、自分のことは顧みられない等、適切な自己認識ができていない。
- ・ 同級生の独り言を、自分に向けられた悪口だと受け取ってしまう。時には、相手に対して、暴言を吐いたり、手を出したりしてしまうことがある。
- ・ 作業活動に関しては、理解力が高く、作業能力も抜群である。
- ・ 今年度は、菓子工房(クッキー製造)に所属している。冷凍した状態のクッキーの生地を切って、天板に並べる作業をしており、作業を一人で任せることができる。
- ・ 菓子工房の作業が好きで、慣れた作業をしている時には、周囲の生徒の言葉をあまり意識していないが、時折、他の生徒が作業活動に取り組む様子を非難する時がある。

b. W男(高等部3年)の実態

- ・ 高等部から本校に在籍している。
- ・ 自分のことを「ダメ人間」と評する等、自己評価が低い。
- ・ 理解力や作業能力は高いが、何事に対しても、自分の持っている力を十分に発揮しようとしていないように見える。
- ・ 真面目に取り組むように求められる場面で、わざとふざけて自分の立場を悪くする姿が見られる。
- ・ 他の生徒に対しては、相手を傷つけることは決して言わなかったり、自分を下位において周囲の笑いを取ったりするので、高等部の生徒の中で人気があり、W男と一緒に過ごすことを好む生徒が多い。
- ・ 今年度は、菓子工房(パッケージ)に所属している。仕事が立て込んでいない時には、教師に準じて、パッケージの作業全体を見ながら、作業活動を進めることができる。一緒に作業をしているR男に対しても、的確に仕事を回している。

c. J男とW男の関係について

休み時間には、二人が一緒にパソコンやカードゲームをしたり話をしたりしている姿が見られる。また、休日にJ男がW男を家に招いて、泊まりがけで一緒に過ごすこともある。J男にとっては、今まで友人と呼べる相手がいなかったようで、W男のことを初めてできた友達だと思っているようである。

②教師の指導・支援の方向性

- ・ J男もW男も共に理解力が高い生徒なので、基本的には各自の担当する作業を本人たちに任せて、教師からの指示や支援をできるだけ少なくするように心がけた。
- ・ J男は、教師からの意見や指示よりも、W男からの意見に耳を傾ける様子が見られた

ので、W男とJ男の間で相互評価ができるような体制を作ろうと考えた。

### ③実践

ある日、クッキーの袋詰め作業をしていたW男が、菓子工房（パッケージ）担当の教師に対して、次のように話した。

W男：「クッキーの厚さがだんだん薄くなってきて困っている。」

それを聞いた教師は、W男に対して、クッキーの生地を切る担当のJ男に直接伝えるように勧め、その場を設けた。

W男は、J男に対して、次のように話した。

W男：「（クッキーが薄いと）ミックスの袋詰めをする時、（重さが）100gになるように調整用のクッキーを多く入れないといけないから、（袋詰め作業の）効率が悪くなる。」

「クッキーが薄いと、割れやすくなって、廃棄するクッキーが多くなる。」

「（クッキーが薄いと）見た目もよくないよ。」

「だから、厚さを元に戻してほしい。」

W男の話を聞いて、J男は「しまった」という表情をしていた。その後も、真面目な表情で、W男の伝えたいことを受け止めながら聞いていた。J男は、W男の話の中で、「廃棄するクッキーが多くなる」ということが一番心に響いていたようである。

そして、次のような会話が続いた。

W男：（自分もクッキー製造で作業をしたことがあるから）「切るのが大変なのはわかっているけれど、（改善）できる？」

J男：「直せると思う。」

W男：「J男、頼むよ。」

このやりとりを受けて、後日、J男の作業学習での新たな目標を立てることにした。その際には、J男、W男、菓子工房（クッキー製造）担当の教師の三者で話し合いを行った。新たな目標は「厚さを均等にして切る」とした。2学期に入ってから、菓子工房（クッキー製造）では、生徒との面談の機会を持ち、作業学習での生徒一人一人の新たな目標を決めていた。しかし、J男だけは、教師が何を聞いても「特になし」と答えていたので、目標が立てられなかった。作業を通して、W男から意見をもらったことで、新たな目標を立てることができた。

そして、作業に対する評価も、W男からの意見をもらえるように、体制を整えた。厨房で製造したクッキーをパッケージの部屋に運ぶ時に、クッキーを切って焼いた当日の作業日誌を一緒に渡し、W男に評価を依頼している。

W男のやりとりと、目標と評価の仕方を整えてから、J男の様子に変化が見られた。クッキー生地を切っている最中に、次のような言葉が聞かれた。

J男：「先生、これでいいかな」

J男は、もともと責任感が強く、クッキー生地を切る作業に対しても責任感を持って取り組んでいたが、教師の助言に耳を傾けたり、支援を求めたりする様子はあまり見られなかった。しかし、「厚さを均等にして切る」という目標を決めて、W男から評価をもらうということになったことで、作業中に教師に対して評価を求めることにつながったものと思われる。



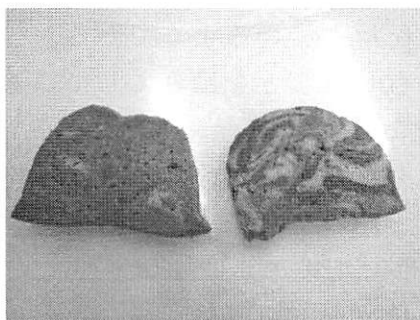
これら一連の経過の後、W男とJ男は、クッキーの生地を作っている生徒に対して、次のように伝えていた。

W男：「マーブルのクッキー生地を作る時に、あまり混ぜすぎないほうが、きれいになる」（写真参照）

J男：「（型に生地をしっかりと詰めてもらわないと、形が）ぐちゃぐちゃになるから困る」（スライド参照）

「ラップ（のかけ方）が悪いと（クッキーの形が）悪くなる」

また、他の生徒からも同様に、互いに意見を述べるが見られ、生徒同士で、自分たちが製造・販売している「すずかけクッキー」をよりよいものにしていこうとする目的意識が見られるようになってきた。



マーブルのクッキーの違いを伝えるために撮影した写真



型にしっかりと生地を詰めることを求める意見（学習発表会でのスライド）

#### ④まとめ

自分のことに対しては、まだ否定的な言葉で表現するW男であるが、作業学習の場面では自信を持って判断し、作業活動に取り組んでいる。また、教師に対して「J男がなぜこんなふうになったのかね？」と何度も確認を求める姿が見られ、自分の存在や言動が、J男に対してよい影響を与えていることを感じているのではないかと思われる。

J男は、クッキーの出来映えを通して、仕事に関する的確な自己認識ができるようになってきていると思われる。「教師の言うことは聞けなくても、友達の言うことには耳を傾けられる」という思いは、高校生としては年齢相応のものであり、生徒同士のつながりの中で作業に取り組む姿を今後も大切にしていきたい。

具体的には、菓子工房（パッケージ）で袋詰めをする時に、W男が足りないクッキーの種類に気付いたら、菓子工房（クッキー製造）のJ男に直接依頼をする体制を検討したい。私たち教師は、生徒自身がより主体的に考えて、作業活動に取り組めるように支援していきたい。

(6) 事例Ⅱ 生徒が現在「できる活動」「している活動」をもとに、生徒の思いを満たすことを目指した事例  
(高等部1年F子：菓子工房 材料購入・製品搬入)

①生徒の実態

- ・ 中学部から本校に在籍している。
- ・ 視覚障害（先天性白内障、網膜剥離）、先天性脳中枢奇形（脳梁欠損、前頭葉奇形）がある。
- ・ 「人の役に立つことをしたい」「頑張っていることを先生に認めて欲しい」という思いを強く持っているが、自分の思いと実際の行動とが噛み合わず、空回りしてしまうことが多い。
- ・ 相手に対して、一方的に関わったり、同じことを何度も繰り返し尋ねたりすることが多い。
- ・ 自分の思いを伝える時に独特の表現をするため、相手に伝わりにくく、「自分の思いを十分に受け止めてもらっていない」という思いを持っているようである。
- ・ 自分の頑張っていることを特定の教師に認めてもらうことを励みにしているが、一方で、大人からの過度の声かけや支援を強く拒むことがある。
- ・ 高等部に入った当初は、本人に合った作業内容を見つめるために、様々な作業種目に試行的に取り組んできた。現在は、午前はクッキーの材料購入や製品搬入を行い（菓子工房所属）、午後はクッキーの生地作りに使用した後のボウル等を拭くためのペーパーを畳んで配達する作業を行っている（チャレンジ工房所属）。

②教師の指導・支援の方向性

F子の「できる活動」や「している活動」を増やすことよりも、現在「できる活動」、「している活動」を活用することを通して、「人の役に立つことをしたい」「頑張っていることを先生に認めて欲しい」というF子の思いを満たすように指導や支援をしていきたい。

③実践

本校高等部では、クッキーの材料を生徒と教師とで購入している。毎回、クッキー製造とパッケージの各グループから依頼を受けて、材料を購入している。

材料購入に出かける前には、作業日誌をもとに、教師が買い物の各手順について、「自分ですか」「教師に頼むか」をF子に尋ね、F子を選択している。自分の自信のあることに対しては、買い物に行く前から「自分でする」を選択している。F子の選択の様子（自己評価）と教師による評価とは、ほぼ一致しており、買い物については的確な

作業日誌 買い回り ぶりひかり 名前( )

12月11日 曜日

お店の名前( )

買うもの( マーガリン ジンジャー・ブレンダー 等 )

だれと 一人で 姉の生徒と一緒に 先生と一緒に

	行く前	行った後
1 カート・かごを借り	先生	先生
2 商品を選んで、レジまで行く	Q	Q
3 お金を払う、おつりをもとらう 財布にレシートを入れる	Q	先生
4 空き箱をもとらい、商品を入れる	Q	Q
5 カート・かごを返す	先生	Q
6 バス(学校)まで帰る	先生	先生
7. 買い回り完了	先生	Q

感想

「自分でする」を選んで、お金の計算も自分でできた。

マーガリンは、予備のマーガリンを買ったので、おつりも自分で計算した。

買い回り完了、お金の計算も自分でできた。

F子の作業日誌



自己評価をしている印象を受けている。

それぞれの店へは、スクールバスを使って移動している。買い物へ行く前の車内では、F子は、休む間もなく教師に話しかけている。それは、買い物や近い先にある行事等に対する不安の表れではないかと、普段の様子等をもとに推測している。教師は、F子の話に対して、F子の話す言葉をもとに、F子の意図することを推測したうえで、的確な表現に言い換えてそれでよいかを確かめたり、質問に対する返答をしたりしている。

また、学習発表会前には、「利用しているデイサービスの職員や他の利用者に学習発表会に来てもらいたい、クッキーを買ってもらいたい」ということを自分なりの表現で何度も教師に話していた。そして、学習発表会当日に、デイサービスの職員や他の利用者が実際にクッキーを購入してくれると、とてもうれしそうにしていた。このことは、「自分が菓子工房の一員であり、自分が作業学習で関わっている製品を、自分の知り合いに購入して欲しい」というF子の思いの表れであると捉えている。このことは、金沢大学の大学祭で製品販売をした時に、自分でクッキーを購入し、翌日に母親の支援を受けながら、県外に住む祖父母にクッキーを郵送したことからも推測される。

食品スーパーや業務用スーパー等で商品を購入する時には、一人で商品を見つけることや指示された数量だけ商品をかごに入れること、代金を支払うことが難しい様子である。それに対しては、買い物の技能に対する指導をねらいにしてはいないため、教師がF子のできない部分を補いながら一緒に買い物をしている。また、ホームセンター等の大型店舗では、教師がF子から少し離れたつもりであっても、F子にとっては教師の存在を自分で全く把握できなくなるようで、「〇〇先生！」と大きな声で叫ぶことがあった。そのため、教師はF子から近すぎず、離れすぎない距離で歩くようにしている。

また、商品を購入する際に、F子は、「これ何するの?」「どこで使うの?」と尋ねることがある。特に、クッキーそのものとは関係の薄い材料（パッケージ用のカラータイやラベルシール等）の際に、尋ねることが多い。その質問に対して、教師は「これは、クッキーを入れる袋です」等と本人に分かるように口頭で説明している。それに対して、F子は質問を続ける時もあるれば、それで質問を止める時もある。質問を続ける時は、まだ十分に理解できていない時で、質問を止める時は、理解できた時ではないかと推測している。

買い物の後の車内では、購入した商品の入ったレジ袋の口を自分で縛り、いつでも持って行けるような様子でいる。F子からは、購入した商品を厨房に配達して喜んでもらうことを心待ちにしているのではないかとと思われる。

スクールバスが学校に到着した後は、購入した商品を、クッキー生地作りの厨房のある生活訓練棟まで一人で運んでいる。商品の多い日には、2～3回往復している。生活訓練棟に入ると、厨房の手前にある保管用の棚に購入した商品を片付けている。購入したケーキ用マーガリンを冷蔵庫の中に入れる際に、教師が「消費期限が見えるように入れて欲しい」「消費期限が新しいものを奥に入れて欲しい」と頼むと、依頼された通りに入れている。配達した時に、教師と生徒から「ありがとう」と言われると、うれしそうにしており、励みになっているものと思われる。

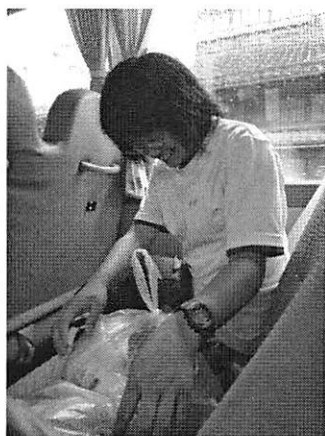
一連の活動の様子を振り返ると、F子にとっては、クッキーの材料を購入する時よりも、配達する時のほうが自信ややりがいに満ちているように伺える。

#### ④まとめ

この事例は、クッキーの材料を配達することを通して、「人の役に立ちたい」「頑張っていることを先生に認めて欲しい」という思いを満たすことにつなげた事例である。そのことによって、作業学習の場面では、F子の普段の様子よりも落ち着いた行動が見られたり、「できました」「ありがとう」「お願いします」等と言ったりする様子が見られている。

F子にとっては、クッキーの材料を配達する作業が、精一杯取り組むことができ、かつ首尾よく成し遂げられる活動である。また、クッキーの生地作りやパッケージの担当の生徒から「〇〇と△△をお願いします」と直接依頼され、配達した時に「ありがとう」と直接言われることが、「人の役に立っている」という実感を伴い、自己効力感や自己有用感を感じていると推測される。

学校生活においては、「できることが増える」ように指導や支援を行うことも大切であるが、同時に「現在一人でできることを生かして、自己効力感や自己有用感につなげる」ことも大切にしていきたいと考えている。



配達するのを心待ちにしているF子



材料を配達しているF子

#### 4. まとめ

##### (1) 今年度の研究のまとめ

今年度は、目標設定と評価のあり方について意識しながら、生徒一人一人の自己実現につながるような作業学習での学習内容のあり方について、実践を通して検討してきた。その結果、以下のような成果と課題が挙げられた。

##### ①生徒の思いを把握すること、育てることについて

- ・面談のように設定された場面だけでなく、作業学習の中でも、生徒と一対一でのやりとりを丁寧に行うことができた。その際には、生徒の発言にまずは耳を傾け、一旦受け止めたうえで、教師の思いや判断を伝えるという姿勢で生徒と関わってきた。そのことによって、生徒は、自分の思いを自分なりの表出の仕方ですこずつ語るようになってきた。時には、過去の出来事に対する思いを話し始めることもあった。
- ・90 ページでも述べたように、個別の指導計画作成に関わって、大目標・小目標を設定するために、生徒の思いを聞き取っているが、聞き取りの方法は、それぞれの教師が試行錯誤しながら行っているのが現状である。一定の質問項目等が決まっていればよいというものではないと思うが、どのような問いかけが、生徒の思いを引き出しやすいのかを知りたいという思いもある。
- ・学習活動を通して、生徒の「したい」「なりたい」という思いを新たに見つかったり、育てたりすることも大切であることに気づいた。プラタナス委員会の活動を通して、「友達と一緒に活動するのが楽しい」「自分たちでアイデアを出してみたい」「リーダーをやってみたい」という要求を生徒たちが潜在的に持っているのではないかと教師は考えるようになった。また、生徒の思いは、固定されたものではなく、生活上または学習上の経験したことや他の生徒、教師、家族等との関係の中で刺激を受けたことによって、変化していくものであると捉えるようになった。

##### ②目標設定について

- ・生徒は、目標について考える時に、自分の経験したことをもとにしている。別の言い方をすれば、生徒は、まだ経験していないことについて目標を立てることは難しい。作業学習での目標を立てる時、生徒は、自分が初めて取り組む作業種においては、目標を考えることが困難であった。そのため、1学期は「仕事を覚える」ことを目標とし、2学期以降に生徒が自分の目標を立てて取り組むようにするのが現実的であると思われる。
- ・作業学習での目標について生徒に尋ねると、生徒は、作業に必要な知識や技能の習得に関する目標を述べるが多かった。また、知識・技能の面で一定の目標を達成すれば、それで満足したり、作業に飽きてしまったりする様子が見られた時もあった。目標は、作業に必要な知識・技能の習得に関する目標だけでなく、作業態度や作業習慣の形成に関する目標についても立てるようにすることが必要であると思われる。
- ・「③作業内容」にも関連するが、工房全体の流れや、生産から消費の流れについて、生徒が理解できるようにすることによって、生徒に目的意識や課題意識が芽生え、自分なりに目標を立てる姿が見られた。これは、前項で挙げた「知識や技能の面で一定の目標を達成すれば、それで満足したり、作業に飽きてしまったりした」生徒にとって、作業に対する新たな意欲を喚起し、持続することにつながった。

- ・目標は、あいまいなものではなく、「どのように行動したら評価されるのか」がわかるような具体的なものにすることがよい。このことは、作業に必要な知識・技能の習得に関する目標に対してはもちろんのこと、作業態度や作業習慣の形成に関する目標に対しては、特に必要である観点であると思われる。菓子工房での「クッキーの厚さを均等に切る」「マーブルクッキーの生地を作る時は混ぜすぎないようにする」は、比較的是っきりとした目標であるように思われる。また、陶工房での「真摯」というキーワードは、具体性に欠けるかもしれないが、作業に取り組む時の基本的な姿勢について、短い言葉で押さえた点で有効であったと思われる。
- ・生徒が自分なりの目標を話した時に、目標をより具体的にしていくような問いかけをする必要がある。D男は、後期の大目標として「作業を頑張りたい」「(野菜の)袋詰めを頑張りたい」と話した。その場では、そこまでやりとりを終えたが、高等部での協議の中で、「袋詰めを“どのように”頑張るのか」をさらに尋ねたらよいという意見があった。「一人で」頑張るのか、「数量を間違えないように」頑張るのか、「袋にしわができないように」頑張るのか等、具体例を複数提示しながら、生徒と一緒により具体的で焦点化した目標にしていくことが必要である。そのためには、具体的なポイントや判断基準について、折に触れて生徒と確認していくことも必要である。
- ・目標は、言語化することが大切である。適時、自分の目標を話したり、書いたりすることによって、生徒が目標を意識し、それに対する自分の行動を評価する様子が見られた。H子は、後期の大目標設定に向けた学級担任とのやりとりの中で、次のように話した。「私の作業での目標は、砂袋で叩く時に手元を見ることです。最近、よそ見をしなくなったので、前よりいいと思います」(陶工房での皿の形を整える作業)。これは、日頃から自分自身の目標について確認し、自己評価・教師による他者評価・相互評価を繰り返し行っていることが関係していると推測される。また、言語化することで、教師も作業に対して目標の視点でよりの確な指導や支援を行うようになった。
- ・作業学習の中では、教師から目標として取り上げたらよいと思うことを生徒に提案することが出てくる。その場合には、生徒の同意を得てから目標を決めることが大切である。この手続きを省くと、評価の際に、「先生が勝手に決めた目標だから」となってしまうことが想像される。
- ・自分の目標を考えることが難しい生徒であっても、今日は「どの活動をするか」「どれくらいの量に取り組むか」「どこで区切りをつけて、休憩を取るか」などを自分で選んだり、決めたりすることは、可能であった。「自分で目標を決めること」ができるまでには、「複数の選択肢から自分で選ぶこと」あるいは「他の選択肢の提示を要求すること」、「自分の要求を伝えること」、「自分の選択や決定の結果を受け入れて、次の選択・決定の機会に生かすこと」などの段階を経ていくように思われる。
- ・昨年度までの研究では、生徒の「したい」「なりたい」という思いをもとに目標を考えることが多かったが、今年度の研究では、学習活動を通して「自分で必要だと感じたこと」、「これから頑張りたいと感じたこと」をもとに目標を考えることがあった。生徒の思いを生かした目標設定を行う時には、この2つの側面があると思われる。

### ③作業学習での学習内容について

- ・工房(作業種目)全体の流れや、生産から消費の流れについて、学習する機会を持ち、

自分が工房の中でどのような役割を担っているのかを知る機会を持つことが必要である。生徒にとって初めての作業種目に取り組む時には、自分がいま取り組もうとする作業に必要な知識や技能の習得に重きが置かれる。そこで、一定の知識や技能を習得した頃に、工房（作業種目）全体の流れや、生産から消費の流れについて、教師が伝えたり、生徒が自分たちで整理したり、伝え合ったりする活動を設定するとよいと思われる。この活動で学んだことが、作業に対する目的意識や課題意識を持ち、新たな目標を考えることにつながった（「②目標設定について」でも述べた）。今年度の実践では、プラタナス委員会や、学習発表会に向けた活動が該当する。

- ・生徒の視点で作業学習を見つめ直すと、教師にとっては当たり前のことであっても、生徒にとっては曖昧で分かりにくいと思っていることがあることに気づいた。例えば、菓子工房では、事例Ⅱで取り上げたF子の言動を通して、「自分の購入する材料が、製品のどの部分に使われているのか」を生徒と確認していなかったことに気づくことがあった。また、事例Ⅰで取り上げたW男の発言によって、より効率的に取り組めるような配置に改善されたこともあった。今までの作業のやり方にとらわれることなく、生徒とともに改善していく必要性を感じた。
- ・多くの支援を必要とする生徒に対しては、既存の作業種目にとらわれることなく、生徒の「できる活動」「している活動」や強みをもとに、個に応じた作業内容を考えることが有効であると考えている。本校高等部では、昨年度、エコキャップやベルマークの分類・整理の作業を立ち上げ、今年度、梱包用の袋・箱作りの作業を立ち上げた。そして、「チャレンジ工房」という名称にした。いずれも、生徒と教師が、それぞれの強みや「できる活動」を生かして取り組んでいる活動と言えるであろう。

#### ④評価について（他者評価、相互評価、自己評価）

- ・教師による他者評価を行う際には、教師によって評価に大きな違いがないようにしたいと考えている。そのためには、指導・支援の方向性や生徒の様子、生徒の様子から推測したこと等について、教師間で話し合いを重ねていくことが大切であると考えている。
- ・菓子工房で製造したクッキーを金沢大学の生協で販売していることから、本校に実習や参観に来た金沢大学の学生から「クッキーを買いました」と声をかけられたり、大学の教員から「おいしいです」「いつも“大人買い”しています」等と書かれた手紙を頂いたりした。製品納入の生徒だけでなく、クッキー製造・パッケージの生徒にとっても、お客様の存在を意識することにつながった。
- ・学習発表会での製品販売では、製品を購入された方に対してアンケートを行った。そして、各工房でアンケートの結果をもとに、話し合いを行った。生徒は、「アンケートに書かれていたクッキー（種類・形）を販売したらよい」「値札を分かりやすくしたい」等と話していた。お客様のニーズを把握し、それに基づいた製品の製造・販売に役立てる視点を持つことにつながった。今後も継続していきたい。
- ・今年度、生徒同士での相互評価を行うように、意識的に取り組んだ。高等部では、ここ数年、生徒同士（特に、中学部から進学した生徒と、高等部から入学した生徒）をつなぐようにさりげなく支援してきたが、それが作業活動での相互評価に取り組んでいくうえでも基盤となった。今年度の実践では、事例Ⅰが該当する。

- ・作業学習での相互評価を促すきっかけとなったのが、作業活動中の生徒のつぶやきであった。今までは、生徒のつぶやきを聞いた教師が、関係する教師との間で問題を解決していたように思うが、それを生徒同士で伝え合い、問題解決をしていくように、教師が支援していくことで、次の活動への広がりにつなげることができた。
- ・生徒同士で相互評価をするうえで気をつけたいこととして、相手の「人柄」について評価をするのではなく、相手のした「事柄」について評価をするということがある。学習発表会リハーサル後の振り返りと話し合いでは、ある生徒から「〇〇さんは、(発表の順番を待っている時に)足を組んで座っているので、よくないです。」という発言があった。他の生徒の待つ姿勢(「事柄」)について改善を求める発言をしているのだが、他の生徒の「人柄」について非難しているようにも受け取られるような表現であった。また、普段の様子から、「事柄」と「人柄」を混同しているような生徒の言動も見受けられる。生徒同士の相互評価を進めるうえで、教師は、「事柄」と「人柄」を分けることを意識できるように伝える機会を持ったり、より適切な表現の形式を示したりする必要があると思われる。
- ・「目標設定と評価」について考える中で、作業日誌の役割について意識し直した。作業日誌は、自分の立てた目標について、自分や他者と評価をするためのツールであると研究会での話し合いの中で捉え直した。ツールとして、作業日誌を使う工房もあれば、短冊状の紙を使う工房もあった。今年度は、作業日誌について、それぞれの工房・グループで検討、改善を行ったが、今後も、ツールとしての作業日誌等のあり方について引き続き検討していきたい。

## (2) 2年間の研究のまとめ

### ①自己実現につながる思いや行動

2年間の実践を通して見えてきた生徒の姿から、高等部段階における自己実現につながる思いや行動について、以下のようにまとめることができた。

- ・自分の思いを周囲の人に伝えたり、交渉したりすること
- ・自分たちの思いを実現するために、「現在、取り組めること」が何かを具体化したり、計画を立てたりすること
- ・周囲の人の支援を受けながら、具体化した活動に一つずつ取り組むこと
- ・その過程や結果をふまえて、「精一杯取り組んだ」「十分にやり遂げた」という実感を持つこと
- ・他の生徒との活動を通して、自分の得意なことや苦手なこと、自分のものの見方・考え方等について知ること
- ・学校・家庭・社会それぞれの場面において、様々な角度から自分について見つめること
- ・それらを通して、等身大の自分を受け入れること(「自分が、かけがえのない存在として、この集団や社会の中にいてよいのだ」という自信)
- ・「自分は、こんなふう生きていけばよいのだ」と考えられること  
(モデルとなる存在がいること、困難な状況に直面しても、「何とかなる」という思いを持って、その場でできることを考えて、取り組もうとすること)

## ②学校研究テーマ「一人一人の自己実現につながる学校生活の再考」について

平成 20 年度～22 年度の高等部研究では、事例研究を行い、事例対象生徒と個別に懇談の機会を数多く持ったり、高等部の授業に加えて個別に活動の機会を設けたりすることを通して、生徒の自己実現につなげる実践を行ってきた。この方法では、少数の生徒に対しては、生徒の自己実現につなげることはできたが、高等部の生徒全員に対して自己実現につなげることは難しいのではないかと考えられた。

そこで、昨年度と今年度の高等部研究では、高等部の生徒全員を対象にして、授業研究を行ってきた。生徒の実態をふまえた学習内容や生活に結びついた学習内容を選択し、学習活動を展開することによって、生徒一人一人の自己実現につなげることができるのではないかと考えた。

以前の研究と現在の研究から、教師と生徒とのやりとりを一つずつ抽出し、比較したところ（123 ページの図Ⅱ－3－10、図Ⅱ－3－11 参照）、学習活動を介してやりとりを行う現在の方が、やりとりが具体的で、小さなつぶやきから段々と発展して、その後の「目標と評価」という継続したやりとりになっている。また、生徒と教師との一対一の関係から、活動のグループ間に関係に拡大している。図Ⅱ－3－11 には表記しなかったが、同様に、クッキーの品質に関わる生徒のつぶやきから、発展したやりとりがその後複数行われている。生徒同士で話し合いながら活動に取り組む姿が、研究に取り組む前よりも、より多く見られるようになった。

以上のことから、「生徒一人一人の自己実現につながる学校生活」については、高等部として、次のように考えた。

学習活動を充実させることによって、学習活動を介した教師と生徒のやりとり、生徒同士のやりとりが充実し、生徒の既有知識や自己認識が更新されることが、生徒一人一人の自己実現につながる生活となるのではないか

## ③高等部研究テーマ「自己実現につながる学習内容のあり方」について

②で述べたように、生徒一人一人の自己実現につなげるためには、学習活動を充実させることが大切であると考えた。具体的には、次のようにまとめられる。

- ・ 高等部段階では、教師や社会の側から「卒業後の生活に必要である」と考えられるものを学習内容に取り入れることが多いが、生徒が学習することの意味を理解したり、目的意識を持ったりできるようにすることも同時に必要である。
- ・ 多くの支援を必要とする生徒に対しては、生徒の興味・関心のあることや得意なことをもとに、社会的な役割を果たせるような活動に発展させることが有効である。
- ・ 学習活動の中で、生徒一人一人が自分の思いやものの見方・考え方を自分なりの表現方法で伝えられるようにすることや、それをもとに、生徒同士のやりとりが充実するように授業を展開したり、指導・支援を行ったりすることが大切である。
- ・ 自分について見つめ、考えるような題材を設定したり、学習の機会を設けたりすることが必要である。

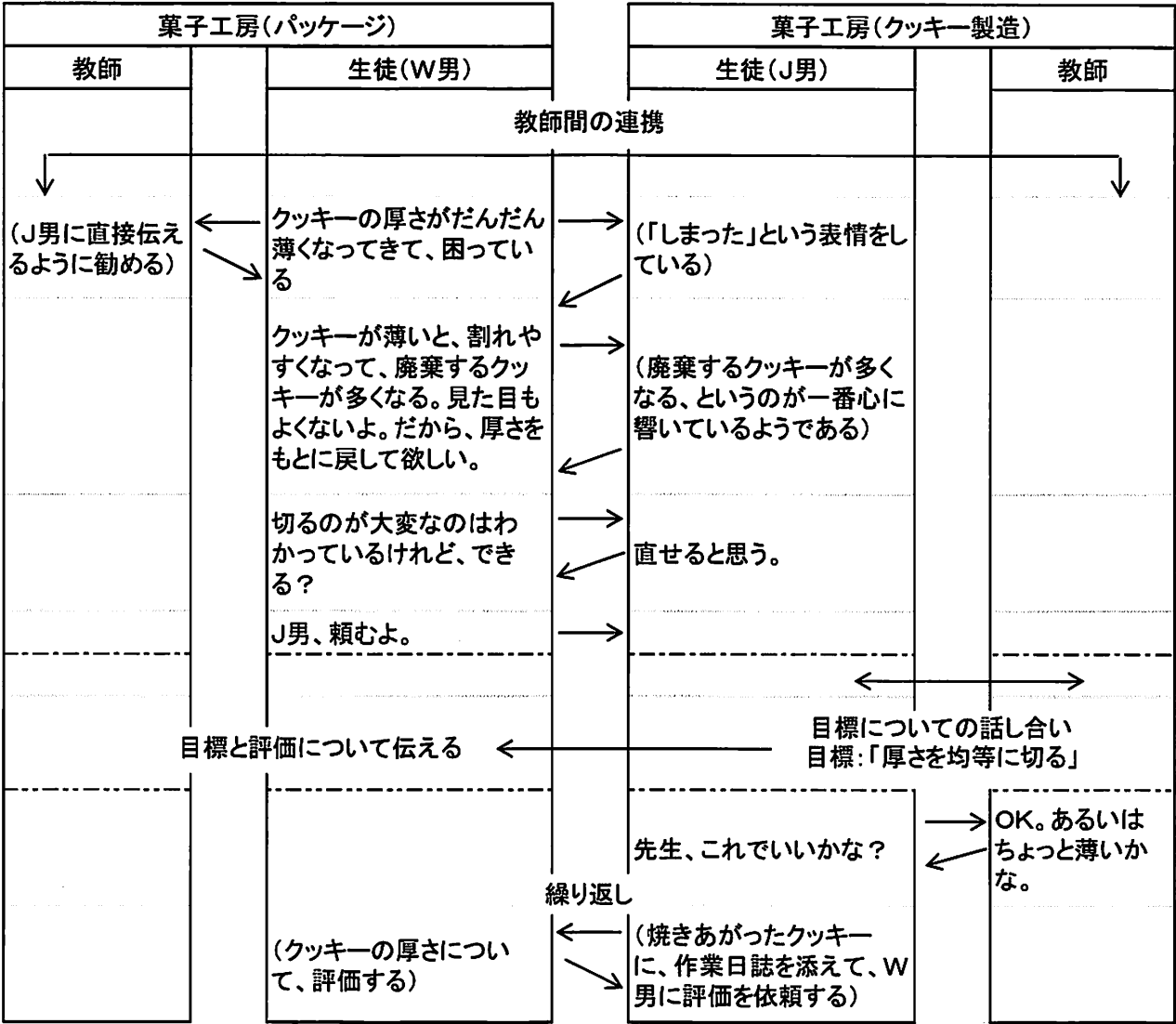
### （３）おわりに

昨年度、「自己実現につながる学習内容のあり方」についての研究に取り組み始めた時、高等部の教師間で確認したことは、「指導内容表を作るための研究にはしない」ということであった。そのため、具体的な学習内容をまとめたものを研究の成果として作成しなかった。しかし、本校高等部として、学習内容を選択するための視点を持つことができた。今後は、各授業担当者が中心となって、先に挙げた視点に沿って、学習内容を選択し、生徒同士のやりとりを大切にしながら、学習活動を展開していきたい。また、実践を行いながら、教師間で省察することを繰り返し行うことで、高等部全体として、学習活動の質を高めていきたい。



教師		生徒
どんな仕事をしたい？	→	(迷いながら) 数学、物理、歴史…
そういう仕事ある？	←	…
どうになりたい？	→	いまよりもIQ高くなりたい。
頭良くなりたい？	←	なりたい。
附属高校に行きたい？	→	今も行きたい。
高校に2回行くことになるよ。	←	えっ？じゃあ、編入します。
編入できないと思うよ。	→	…

図Ⅱ－３－１０ 平成 22 年度の研究での教師と生徒とのやりとり  
(「附属高校に転校したい」という生徒の思いの背景を探ることを目的に行ったもの)



図Ⅱ－３－１１ 今年度の研究での教師と生徒、生徒同士でのやりとり (事例Ⅰより)

(注) どちらのやりとりも、音声を記録したものからではなく、教師のメモから再現したものである。

## 【参考文献】

1. 本校研究紀要 平成 22 年度、平成 23 年度
2. 茂木俊彦 (2008)「自己肯定感のことなど」<http://www.min-ken.org/archives/36>
3. 茂木俊彦 (2011)「障害のある子どもの理解と教育指導」障害者問題研究第 39 巻 2 号
4. 茂木俊彦 (2012)「障害のある子どもの理解と教育指導」平成 23 年度本校教育研究会講演
5. 茂木俊彦 (2012)「子どもに学んで語り合う」全国障害者問題研究会出版部
6. 石川県教育センター (2012) 紀要第 7 号「金沢大学連携研修の成果」
7. 佐藤学 (1996)「教育方法学」岩波書店
8. 藤原義博 (2012)「わかって動ける 子どもの主体性を引き出すための授業改善」実践障害児教育 2012 年 8 月号
9. 国立特別支援教育総合研究所編著 (2011)「特別支援教育充実のためのキャリア教育ガイドブック」ジアース教育新社
10. 菊池一文 (2011)「キャリア教育の視点で見直す—子どもの『なりたい自分』を学校・地域で支援する」第 4 回、第 7 回 実践障害児教育 2011 年 7 月号、11 月号
11. 菊池一文 (2012)「作業学習」石塚謙二監修・全国特別支援学校知的障害教育校長会編著「一人一人の活動と参加を高める領域・教科を合わせた指導」明治図書
12. 「特集 作業学習—今、そのよさと意義を再確認する—」特別支援教育研究 2012 年 10 月号
13. 名古屋恒彦 (2010)「特別支援教育『領域・教科を合わせた指導』の A B C」東洋館出版社
14. 太田正己 (2010)「教材・教具活用の意義と重要性」太田正己監修・石川県立明和養護学校著「特別支援教育に役立つ手づくり教材・教具集」黎明書房
15. 松木健一 (1991)「活動についての覚え書き」学習過程研究 I No. 1 福井大学教育学部学習過程研究グループ
16. 松木健一 (1996)「学校で学ぶことに関する一考察」福井大学教育学部紀要 IV (教育学) 第 51 号
17. 佐伯胖 (1999)「能力と言うモノは存在しない」佐伯胖「マルチメディアと教育」太郎次郎社
18. 新井英靖・三村和子・茨城大学教育学部附属特別支援学校編著 (2011)「発達障害児の感情コントロール力を育てる授業づくりとキャリア教育」黎明書房
19. 菅野仁 (2010)「教育幻想—クールティーチャー宣言」ちくまプリマー新書